高志の国
文学館
KOSHINOKUNI
Museum of Literature

高志の国文学館 紀要

第7号

令和3年度 高志の国文学館 紀要 第7号

目次

Ⅰ

〔企画展概要〕

（1）企画展「映画監督　本木克英 展」　大川原竜一　4

（2）企画展「まど・みちおのうちゅう―「ぞうさん」の詩人からの手紙」　亀島麻衣子　10

（3）企画展「太宰治　創作の舞台裏 展」　永井　清　16

（4）企画展「個性きらめく富山の女性作家たち 展」　綿引　香織　22

（第1期　時代を切り開く）

富山県歌壇・俳壇・詩壇の歴史（近代以降）略年表　28

Ⅱ

〔論文〕

方等みゆき　―富山に女性詩の黎明を告げた詩人　綿引　香織　36

Ⅰ〔企画展概要〕

（1）企画展「映画監督　本木克英　展」　大川原竜一

（2）企画展「まど・みちおのうちゅう―「ぞうさん」の詩人からの手紙」　亀島麻衣子

（3）企画展「太宰治　創作の舞台裏　展」　永井　清

（4）企画展「個性きらめく富山の女性作家たち　展」（第1期　時代を切り開く）　綿引　香織

（1）企画展

「映画監督　本木克英 展」

大川原　竜一

映画監督は、大勢の能力のあるスタッフや俳優を、自分の思うように協力してもらって、一つの作品をつくりあげていく。それが観客を楽しませ、時には社会に影響を与えることもできるというところが、何よりも魅力ではないか。商業映画づくり、娯楽映画づくりに継続して関わっていられるということが大事ではないかと思っています。職人的監督を目指しています。

（本木克英監督インタビュー「わたしの映画づくり」より）

富山県出身の映画監督・本木克英（一九六三年～）。

松竹に助監督として入社。森崎東、勅使河原宏、木下恵介に師事し、平成10年（一九九八）に「てなもんや商社」で監督デビューを果たす。以降、「釣りバカ日誌」シリーズ、「超高速！参勤交代」など話題のエンタテインメント作品をつぎつぎに撮る一方で、テレビドラマや舞台の演出の場でも活躍している。最近では、ラブストーリーや社会派、ミュージカル、時代劇といったさまざまなジャンルの映画のメガホンをとる、いま最も期待を集める映画監督の一人である。令和3年（二〇二一）1月には、約一〇〇年前に富山でおこった米騒動の史実にもとづき、家族を守るために活躍した女性たちにスポットをあてて描いたエンタテインメント歴史群像劇の映画「大コメ騒動」を公開した。登場人物の人となりや、その背景にある時代・社会をえがいて、リアリティや社会的なメッセージを大切にする監督の作品では、人と人とのふれあいや人間の温かさ、面白さが笑いになって表現されている。

本木監督は、庶民の哀歓や日本人の気質に寄りそう喜劇映画を世に問う松竹大船映画の伝統をひきつぎ、エンタテインメント映画の可能性を追求しつづけている。本企画展は、「笑いと感動の娯楽映画を撮りつづける、映画監督本木克英の今を伝える」をコンセプトに作りあげた。本木監督のエンタテインメント映画の世界を、代表作を通して紹介するとともに、人情喜劇を数多く手がけてきた監督の映画力について、インタビュー映像をまじえてせまった。「映画は面白くないといけない。面白い映画を届けたい。」と語る本木監督の、面白くみせるための映画づくりの舞台裏を紐解いた。

まず本展の導入となるエントランス展示では、観覧者が映画のワンシーンを味わえるように、文学館ロビーに監督のデビュー作品「てなもんや商社」に登場した鯉のぼりと、映画「大コメ騒動」の撮影で実際に使用した艀（ハシケ）を置いた。艀とは、浜に積まれた米俵のほか人や荷物を、沖に停泊する汽船へ運ぶために用いた平底の小舟を指す。氷見市の船大工・番匠光昭氏が製作した本船には乗船することができ、ここを撮影スポットとした。米の積み出し阻止のために、おかかたちが向かってくる映画の一場面の大型パネルをバックにして、その再現写真が撮れるようにした。また文学館ロビーには、上映コーナーを設けた。映画「大コメ騒動」に出演した俳優の室井滋さんのほか、左時枝さん、夏木マリさん、立川志の輔さん、内浦純一さんが、本木監督との思い出や素顔を語るスペシャルインタビュー動画（エース・プロダクション制作）を上映した。さらに、映画プロデューサーとフィルムコミッションの立場からの視点で紐解いた、本木克英監督のエンタテインメント映画の秘密をパネルで紹介することができた。

くわえて今回の企画展では、本木監督の映画づくりに対するこだわりを肉声で伝える企画展オリジナルのインタビュー映像を制作している。「映画「大コメ騒動」を語る」と「夢を抱き続けて―企画展にあたって」という内容の映像をエントランス展示にて上映。この二本の映像は、令和3年10月に発売された映画「大コメ騒動」の豪華版ＤＶＤの映像特典として収録された。今後映画づくりに興味をもつ若い方に、監督のメッセージが届けられることを願う。また、企画展示室内では、「わたしの映画づくり」、および「空飛ぶタイヤ」「超高速！参勤交代」「釣りバカ日誌13」の各映画の制作背景やエピソードについて監督が語った映像を流した。それぞれ地元富山への愛情や、監督の映画づくりの根底にある人々に対する温かいまなざしなどが伝わる内容で

あった。

ついで企画展示室内は、富山を舞台とした「大コメ騒動」「釣りバカ日誌13」、および富山と関わりがある「空飛ぶタイヤ」「超高速！参勤交代」という四作品をクローズアップし、「富山県を「映画県」とした本木映画」を知る内容とした。各コーナーには、台本や絵コンテ、デザイン画、ロケ写真、スケジュール表など、本木映画の製作にかかわる貴重な資料を出展した。

導入としては、映画監督本木克英をつくった「モノ語り」（学生時代や松竹入社以降に影響を受けた映画、書籍など）を紹介。くわえて監督が自らの思いを書きこんだ「自作略年譜」を掲げた。例えば、桜谷小学校入学のことがらには、「漫画が好きで、家に閉じこもって絵ばかり描いていることを心配した母が、「外に出て遊ばんともやしみたいになるよ！」と脅し、近所で空手、柔道を習い始める。児童野球にも参加し、野外で遊ぶようになったが、内心漫画家に憧れていた。6年生時の児童発表会で「ベルサイユのばら」の主人公をもじった「マリーあんころもち」を作・演出（これが初めての監督経験）。」とあるなど、少年・青年時代の思い出や当時影響を受けた映画やエンタテイメントなどが記された。

またここでは、監督がこれまで手がけた18作品の映画ポスターを一堂に掲示するとともに、第18回藤本賞新人賞の賞状額や第57回ブルーリボン賞作品賞の万年筆、日本アカデミー賞優秀監督賞の賞状・トロフィーを展示公開した。

「大コメ騒動」コーナーでは、資料を見るのみならず、観覧者に体感しながら「本木映画の世界を知ってもらう」楽しい展示を展開するべく、劇中に登場する米屋「鷲田商店」を再現。さらに、主人公松浦いと役の井上真央さんと、清んさのおばば役の室井滋さんが身につけた衣装を展観した。本映画は県内でロケがおこなわれ、多くの地元サポーターの参加をえて作りあげられており、そのロケメイキング映像も上映した。また、本映画の特徴でもある富山弁を紹介するため、セリフのタペストリーを吊り下げるとともに、撮影中に使用された富山弁練習用の音源を流して音声でも楽しめるようにした。展示した字コンテや予定表などの資料からは、映画制作の舞台裏をのぞくことができた。

映画「空飛ぶタイヤ」は、直木賞作家・池井戸潤作品初の映画化であり、社員や家族を守るため、自らの正義のために大企業に立ちむかっていく勇気と大逆転劇の社会派エンタテインメントである。この展示コーナーでは、監督の書き込み台本や、劇中で使用した赤松運送の作業着、ホープ自動車の帽子などを展示。台本への書き込みからは、職人的監督を目指すと語る監督の細かな段取りの様子や演出に対するこだわりがうかがえた。本映画には「富山ロジスティック」という会社が登場するとともに立山連峰の風景が映しだされており、その場面のデザイン画もならべた。

映画「超高速！参勤交代」は、貯えも人手も時間もないなか、知恵と工夫で逆境にいどむ弱小貧乏藩をえがいた時代劇コメディである。続編の「超高速！参勤交代リターンズ」にて、富山県出身の俳優・西村まさ彦さんが富山弁を話すシーンが登場する。本コーナーでは、西村さんからのメッセージを掲示することができた。また、湯長谷藩主内藤政醇（佐々木蔵之介）の羽織・野袴や雲隠段蔵（伊原剛志）の大扇子、政醇がお咲と出会った「鶴屋」の看板、湯長谷藩のぼりと提灯などを松竹撮影所より借用・展観した。

平成14年（二〇〇二）に公開された「釣りバカ日誌13」は、中堅ゼネコン会社の営業社員のハマちゃん（西田敏行）と社長のスーさん（三國連太郎）のコンビが、富山を舞台に珍騒動をくりひろげる、人気コメディ映画「釣りバカ日誌」シリーズの第15作目である。「釣りバカ日誌イレブン」「釣りバカ日誌12」にひきつづき、本木克英監督がメガホンをとった。本作品は映画を通じて富山県の魅力を全国にひろく情報発信するとともに、地元の住民がロケの支援活動に主体的にかかわり地域の魅力や価値を再発見するきっかけになった。このコーナーでは、ホテル黒部での宴会シーンでハマちゃんが歌った「ホタルイカメンコ」の歌詞や、松竹株式会社より借用した鈴木建設の社章と社員証を展示。それとともに、「釣りバカ日誌」のロケ誘致に際して監督宛てに提出された陳情書や、ロケ地決定をうけて県観光連盟を中心に設立された支援組織の計画書など、秘蔵の資料も公開することができた。

本展覧会の会期はあいにく新型コロナウイルス感染症の緊急事態宣言の実施期間と重なり、会の運営は不自由な状態がつづいたが、エンタテインメント映画の世界をリードする本木克英監督の今を発信した有意義な展示となった。

□主な展示物

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
エントランス（ロビー）				
立体物	デビュー作品「てなもんや商社」で使用された鯉のぼり	—	映画公開年：平成10年（1998）	本木克英ファン倶楽部
映像・動画	本木克英監督インタビュー映像「映画「大コメ騒動」を語る」	高志の国文学館	令和3年（2021）2月26日	高志の国文学館
立体物	映画「大コメ騒動」で使用した艀（ハシケ）	番匠光昭	—	番匠FRP造船
パネル	映画「大コメ騒動」ロケ地マップ	富山県ロケーションオフィス	映画公開年：令和3年（2021）	高志の国文学館
バナー	映画「大コメ騒動」特大バナー	—	映画公開年：令和3年（2021）	ラビットハウス
パネル	富山県ロケーションオフィスとの連携「大コメ騒動」ロケの場合	前佛聡（富山県ロケーションオフィス、富山県観光振興室課長）	令和3年（2021）	高志の国文学館
パネル	本木克英監督が選ぶ「富山県を舞台にしたこんな映画が見たい」	高志の国文学館	令和3年（2021）	高志の国文学館
映像・動画	スペシャルインタビュー動画 左時枝・夏木マリ・立川志の輔・室井滋・内浦純一	エース・プロダクション	令和3年（2021）	エース・プロダクション
映像・動画	本木克英監督インタビュー映像「夢を抱き続けて―企画展にあたって」	高志の国文学館	令和3年（2021）2月26日	高志の国文学館
パネル	本木克英監督「ごあいさつ」	本木克英監督	令和3年（2021）	高志の国文学館
企画展示室内　導入				
映像・動画	本木克英監督インタビュー映像「わたしの映画づくり」	高志の国文学館	令和3年（2021）2月26日	高志の国文学館
パネル	本木克英監督自作略年譜	本木克英監督	令和3年（2021）	高志の国文学館
冊子	映画「てなもんや商社」撮影台本（決定稿）	—	映画公開年：平成10年（1998）	個人
冊子	映画「てなもんや商社」パンフレット	松竹株式会社事業部	映画公開年：平成10年（1998）	個人
ポスター・チラシ等	映画「てなもんや商社」完成披露特別上映チラシ・招待券	黒部青年会議所・北日本新聞社	映画公開年：平成10年（1998）	個人
立体物	映画「ゲゲゲの鬼太郎 千年呪い歌」黄金のぬらりひょん像	—	映画公開年：平成20年（2008）	個人

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
冊子	映画「鴨川ホルモー」撮影台本（決定稿）	—	映画公開年：平成21年（2009）	個人
立体物	映画「鴨川ホルモー」VFX（ビジュアル・エフェクト）部使用　オニの武器	—	映画公開年：平成21年（2009）	個人
記念品	映画「超高速！参勤交代」お礼グッズ（顔は本木監督）	—	映画公開年：平成26年（2014）	個人
記念品	第18回藤本賞　新人賞　賞状額（「てなもんや商社」）	藤本賞選考委員会	平成11年（1999）	個人
記念品	第1回沖縄国際映画祭 Laugh & Peace コンペティション部門ゴールデンシーサー賞　トロフィー（「鴨川ホルモー」）	沖縄国際映画祭実行委員会	平成21年（2009）	個人
記念品	第57回ブルーリボン賞　作品賞　万年筆（「超高速！参勤交代」）	東京映画記者会	平成27年（2015）	個人
記念品	第38回日本アカデミー賞　優秀監督賞　賞状・トロフィー（「超高速！参勤交代」）	日本アカデミー賞協会	平成27年（2015）	個人
記念品	第42回日本アカデミー賞　優秀監督賞　賞状・トロフィー（「空飛ぶタイヤ」）	日本アカデミー賞協会	平成31年（2019）	個人
書簡	第42回日本アカデミー賞　授賞式招待状	日本アカデミー賞協会	平成31年（2019）	個人
冊子	第42回日本アカデミー賞　授賞式パンフレット	日本アカデミー賞協会	平成31年（2019）	個人
パネル	本木克英監督フィルモグラフィー	高志の国文学館	令和3年（2021）	高志の国文学館
ポスター・チラシ等	映画「てなもんや商社」ポスター	製作：松竹、フジテレビジョン	映画公開年：平成10年（1998）	個人
ポスター・チラシ等	映画「釣りバカ日誌イレブン」ポスター	製作：松竹	映画公開年：平成12年（2000）	個人
ポスター・チラシ等	映画「釣りバカ日誌12　史上最大の有給休暇」ポスター	製作：松竹	映画公開年：平成13年（2001）	個人
ポスター・チラシ等	映画「釣りバカ日誌13　ハマちゃん危機一髪！」ポスター	製作：松竹	映画公開年：平成14年（2002）	個人
ポスター・チラシ等	映画「ドラッグストア・ガール」ポスター	製作：テンカラット、電通、衛星劇場	映画公開年：平成16年（2004）	個人

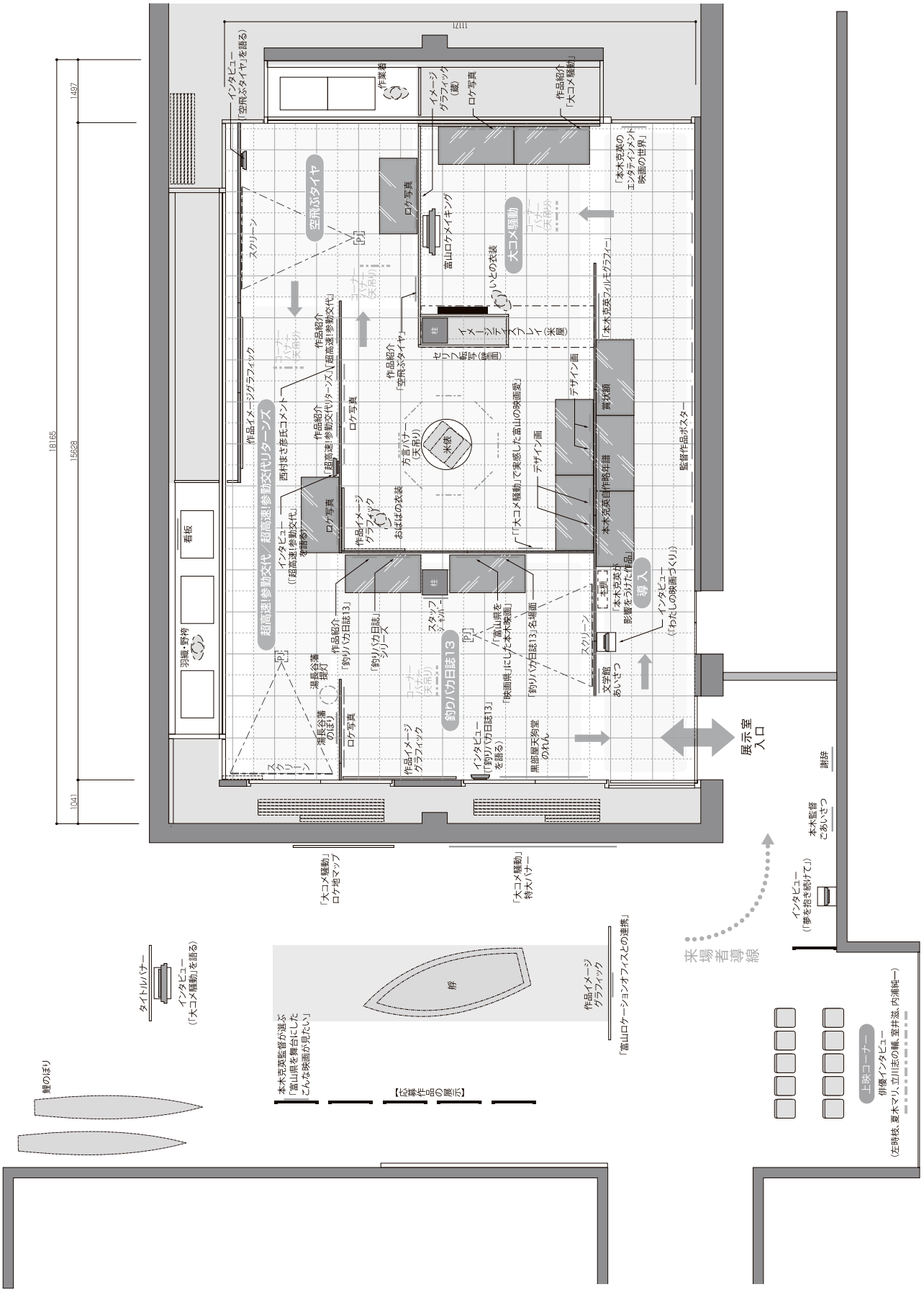
種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
ポスター・チラシ等	映画「ゲゲゲの鬼太郎」ポスター	製作：フィルムパートナーズ（幹事社：松竹）	映画公開年：平成19年（2007）	個人
ポスター・チラシ等	映画「犬と私の10の約束」ポスター	製作：フィルムパートナーズ（幹事社：松竹）	映画公開年：平成20年（2008）	個人
ポスター・チラシ等	映画「ゲゲゲの鬼太郎　千年呪い歌」ポスター	製作：フィルムパートナーズ（幹事社：松竹）	映画公開年：平成20年（2008）	個人
ポスター・チラシ等	映画「鴨川ホルモー」ポスター	製作：フィルムパートナーズ（幹事社：松竹）	映画公開年：平成21年（2009）	個人
ポスター・チラシ等	映画「おかえり、はやぶさ」ポスター	製作：製作委員会（幹事社：松竹）	映画公開年：平成24年（2012）	個人
ポスター・チラシ等	映画「関西ジャニーズJr.の京都太秦行進曲！」ポスター	製作：松竹	映画公開年：平成25年（2013）	個人
ポスター・チラシ等	映画「すべては君に逢えたから」ポスター	製作：製作委員会（幹事社：ワーナー・ブラザース映画）	映画公開年：平成25年（2013）	個人
ポスター・チラシ等	映画「超高速！参勤交代」ポスター	製作：製作委員会（幹事社：松竹）	映画公開年：平成26年（2014）	個人
ポスター・チラシ等	映画「超高速！参勤交代リターンズ」ポスター	製作：製作委員会（幹事社：松竹）	映画公開年：平成28年（2016）	個人
ポスター・チラシ等	映画「空飛ぶタイヤ」ポスター	製作：製作委員会（幹事社：松竹）	映画公開年：平成30年（2018）	個人
ポスター・チラシ等	映画「映画　少年たち」ポスター	製作：製作委員会（幹事社：松竹）	映画公開年：平成31年（2019）	個人
ポスター・チラシ等	映画「居眠り磐音」ポスター	製作：製作委員会（幹事社：日本テレビ放送網）	映画公開年：令和元年（2019）	個人
ポスター・チラシ等	映画「大コメ騒動」ポスター	製作：製作委員会（幹事社：エース・プロダクション）	映画公開年：令和3年（2021）	個人
パネル	映画監督・本木克英のエンタテインメント映画の世界	高志の国文学館	令和3年（2021）	高志の国文学館
映画「大コメ騒動」コーナー				
書籍	戸屋まい『小学館文庫　大コメ騒動　ノベライズ』	小学館	令和2年（2020）	高志の国文学館
立体物	いと（井上真央）が米俵を運ぶときに使っていたひも	松竹撮影所	映画公開年：令和3年（2021）	松竹撮影所

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
冊子	「大コメ騒動」撮影台本（決定稿）	—	映画公開年：令和3年（2021）	個人
メモ・書類	字コンテ《S#15》	—	映画公開年：令和3年（2021）	個人
メモ・書類	劇中で使用した「富山日報」の記事	松竹撮影所	映画公開年：令和3年（2021）	松竹撮影所
映像・動画	映画「大コメ騒動」富山ロケメイキング	エース・プロダクション	令和3年（2021）	エース・プロダクション
パネル	米屋「鷲田商店」ディスプレイ	高志の国文学館	令和3年（2021）	高志の国文学館
書画	デザイン画「警察署　表」「警察署　署内」「留置所　入口向け」「留置所　かえし」「薬問屋　表」「薬問屋　屋内」「薬問屋　一角」	作画：倉田智子 美術デザイナー	映画公開年：令和3年（2021）	個人
書画	図面「東岩瀬海岸」「警察署」「大阪新報社　外観」「大阪新報社」「薬問屋」「薬問屋　一ノ瀬の部屋」	作画：倉田智子 美術デザイナー	映画公開年：令和3年（2021）	個人
メモ・書類	予定表　10月26日・10月28日・10月30日	—	映画公開年：令和3年（2021）	個人
パネル	「大コメ騒動」で実感した富山の映画愛	岩城レイ子 プロデューサー（エース・プロダクション）	令和3年（2021）	高志の国文学館
衣料	松浦いと（井上真央）・清んさのおばば（室井滋）の衣装	松竹撮影所	映画公開年：令和3年（2021）	松竹撮影所
立体物	米俵	JA全農とやま	令和3年（2021）	JA全農とやま
音声・音響	映画「大コメ騒動」練習用「富山弁」音声	—	令和3年（2021）	エース・プロダクション
映画「空飛ぶタイヤ」コーナー				
映像・動画	映画「空飛ぶタイヤ」予告編	松竹株式会社	映画公開年：平成30年（2018）	松竹株式会社
冊子	「空飛ぶタイヤ」映画台本（第一稿）、撮影台本（決定稿）	—	映画公開年：平成30年（2018）	個人
メモ・書類	絵コンテ《S#2》	—	映画公開年：平成30年（2018）	個人
メモ・書類	CGリスト表	—	映画公開年：平成30年（2018）	個人
書画	図面「事故現場」「赤松運送　事務室・社長室・応接室」「ホープ自動車　カスタマー課」	—	映画公開年：平成30年（2018）	個人

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
衣料	赤松運送の作業着	—	映画公開年：平成30年（2018）	個人
書画	デザイン画「赤松運送　表」「赤松運送　社長室」「赤松運送　事務所」「赤松運送　整備棟」「富山ロジステック」	作画：西村貴志 美術デザイナー	映画公開年：平成30年（2018）	個人
衣料	ホープ自動車の帽子	—	映画公開年：平成30年（2018）	個人
映像・動画	本木克英監督インタビュー映像「映画「空飛ぶタイヤ」を語る」	高志の国文学館	令和3年（2021）2月26日	高志の国文学館
映画「超高速！参勤交代」コーナー				
パネル	西村まさ彦氏コメント	西村まさ彦	令和3年（2021）	高志の国文学館
映像・動画	本木克英監督インタビュー映像「映画「超高速！参勤交代」を語る」	高志の国文学館	令和3年（2021）2月26日	高志の国文学館
冊子	映画「超高速！参勤交代」プレスシート	—	映画公開年：平成26年（2014）	個人
メモ・書類	映画「超高速！参勤交代」長期スケジュール表、仮スケジュール表（8月18日版）、時間香盤表（9月8日）	—	映画公開年：平成26年（2014）	個人
冊子	映画「超高速！参勤交代」撮影台本（決定稿）	—	映画公開年：平成26年（2014）	個人
メモ・書類	映画「超高速！参勤交代」アクション字コンテ《S#75》	—	映画公開年：平成26年（2014）	個人
メモ・書類	映画「超高速！参勤交代」政醇一行の並び順、湯長谷藩の参勤行列図	—	映画公開年：平成26年（2014）	個人
立体物	映画「超高速！参勤交代」政醇がお咲と出会った「鶴屋」の看板	松竹撮影所	映画公開年：平成26年（2014）	松竹撮影所
立体物	映画「超高速！参勤交代」湯長谷藩のぼり（旗のみ）、湯長谷藩提灯	松竹撮影所	映画公開年：平成26年（2014）	松竹撮影所
衣料	映画「超高速！参勤交代リターンズ」内藤政醇（佐々木蔵之介）の羽織・野袴	松竹撮影所	映画公開年：平成28年（2016）	松竹撮影所
立体物	映画「超高速！参勤交代リターンズ」雲隠段蔵（伊原剛志）の大扇子	松竹撮影所	映画公開年：平成28年（2016）	松竹撮影所
映像・動画	映画「超高速！参勤交代リターンズ」「超高速！参勤交代」予告編	松竹株式会社	映画公開年：平成26年（2014）	松竹株式会社

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
映画「釣りバカ日誌13　ハマちゃん危機一髪！」コーナー				
メモ・書類	絵コンテ《S#1》多摩川の河原	—	映画公開年：平成14年（2002）	個人
メモ・書類	富山ロケーション・スケジュール表、「トロッコ列車撮影について」	—	映画公開年：平成14年（2002）	個人
冊子	「釣りバカ日誌13」撮影台本	—	映画公開年：平成14年（2002）	個人
メモ・書類	ホテル黒部での宴会でハマちゃん（西田敏行）が歌った「ホタルイカメンコ」の歌詞	—	映画公開年：平成14年（2002）	高志の国文学館
衣料	黒部ロケ　スタッフジャンパー	—	映画公開年：平成14年（2002）	高志の国文学館
立体物	鈴木建設　社員証（浜崎伝助／草森課長／桐山桂）、社章	—	映画公開年：平成14年（2002）	松竹株式会社
メモ・書類	浜崎伝助（西田敏行）名刺、鈴木一之助（三國連太郎）名刺	—	映画公開年：平成14年（2002）	高志の国文学館
書画	図面「天狗堂会長室」	—	映画公開年：平成14年（2002）	個人
メモ・書類	『釣りバカ日誌』いきいき富山誘致委員会　陳情書	『釣りバカ日誌』いきいき富山誘致委員会	平成13年（2001）	個人
メモ・書類	『釣りバカ日誌13』いきいき富山実行委員会資料「必笑（勝）祈願」計画書	『釣りバカ日誌13』いきいき富山実行委員会	平成14年（2002）	高志の国文学館
映像・動画	映画「釣りバカ日誌13」予告編	松竹株式会社	映画公開年：平成14年（2002）	松竹株式会社
映像・動画	本木克英監督インタビュー映像「映画「釣りバカ日誌13」を語る」	高志の国文学館	令和3年（2021）2月26日	高志の国文学館
立体物	黒部屋天狗堂のれん（天狗堂の正面入り口）	—	映画公開年：平成14年（2002）	高志の国文学館

□企画展示室平面図


空飛ぶタイヤ
大コメ騒動
超高速!参勤交代 超高速!参勤交代リターンズ
釣りバカ日誌13
導入
上映コーナー
展示室入口
来場者導線
謝辞
本木監督ごあいさつ
インタビュー(「夢を抱き続けて」)
「富山ロケーションオフィスとの連携」
作品イメージグラフィック
【仕掛け品の展示】
本木克英監督が選ぶ「富山県を舞台にしたこんな映画が見たい!」
タイトルバナー
インタビュー(「大コメ騒動」を語る)
鯉のぼり
「大コメ騒動」ロケ地マップ
「大コメ騒動」特大バナー
羽織・野袴
看板
スクリーン
作業着
富山ロケメイキング
いとの衣装
おばばの衣装
米俵
デザイン画
賞状額
監督作品ポスター
本木克英自作略年譜
「本木克英のエンタテインメント映画の世界」
「本木克英フィルモグラフィー」
インタビュー(「わたしの映画づくり」)
文学館あいさつ
黒部渓谷海堂のれん
「釣りバカ日誌13」各場面
「映画県」にした本木映画
スタッフ・シャルニ
「大コメ騒動」で実感した富山の映画愛
方言バナー(天吊り)
西村まさ彦氏コメント
作品紹介「空飛ぶタイヤ」
作品紹介「超高速!参勤交代リターンズ」
作品紹介「大コメ騒動」
作品紹介「釣りバカ日誌13」
「釣りバカ日誌」シリーズ
湯長谷藩の誇り
湯長谷藩の歴史
インタビュー(「超高速!参勤交代」を語る)
インタビュー(「空飛ぶタイヤ」を語る)
インタビュー(「釣りバカ日誌13」を語る)
ロケ写真
作品イメージグラフィック(歳)
作品イメージグラフィック(屋)
セリフ転写(壁面)
18165
15628
1497
1041
11171

（2）企画展
「まど・みちおのうちゅう―「ぞうさん」の詩人からの手紙」

亀島麻衣子

誰もが一度は口ずさんだことのある童謡「ぞうさん」の歌詞は、子象への声掛けからはじまる。

「ぞうさん　ぞうさん　おはなが　ながいのね」

改めて考えてみると、言われた子象が、からかいや悪口と受け取っても仕方のない言葉である。ところが、子象は次のように答えるのである。

「そうよ　かあさんも　ながいのよ」

まどは言う。子象は褒められたつもりなのだと。自分が長い鼻を持った象であることを、かねがね誇りに思っていたのであり、つまり「象に生まれてうれしい象の歌」であると。

まどは、やさしい言葉で大切なことを伝える詩人である。

ポスターには、まどの詩「ぼくが ここに」を引用した。

「ぼくが　ここに　いるとき
　ほかの　どんなものも
　ぼくに　かさなって
　　ここに　いることは　できない」

ここには、「ぞうさん」と同じく、ありのままの自分を唯一無二のものとして存在することを受け止める姿が描出されている。上皇后陛下美智子さまが英訳とご朗読をされた、まどの詩「リンゴ」も同旨と言える。

本展では、童謡詩人から詩人へ、そして1994年に「国際アンデルセン賞・作家賞」を日本人で初めて受賞するまでの軌跡と、104歳で亡くなるまで2000を超える詩を書き続けたまどの作品世界―「うちゅう」を紹介し、まどが伝えようとした大切なことを受け取ることができる場を目指した。

展示構成については次のとおりである。

エントランスでは、まどの詩から特にメッセージ性の高い作品を取り上げ、イメージ写真を添えて構成したパネル「まどさんからの手紙」を作成し展示した。また、「まどさんの詩のとびら」を設置し、まどの詩に出会うための仕掛けとした。「まどさんの詩のとびら」は、「シマウマ」「ニンジン」「ケムシ」などの短詩を取り上げ、題にあわせてデザインした四角や丸、三角のかたちをした扉をあけると、詩のテキストが現れるようになっている。扉のデザインの抽象性を高くすることで、観覧者の好奇心をくすぐることを企図した。扉の取り付け位置は子供の目線に合わせ低くしたが、実際には子供から大人まで幅広い世代が扉を開いてくださった。

前述の上皇后陛下美智子さまによる英訳とご朗読もエントランスにて展示を行った。上皇后陛下美智子さまの英訳が国際的にまどの評価を高め、まどの国際アンデルセン賞受賞の後押しとなった旨を説明したパネルを作成したほか、ご朗読の様子を映像で紹介した。ご協力いただいた宮内庁のご意向により、このコーナーは無料で公開することとなり、「まどさんからの手紙」、「まどさんの詩のとびら」もあわせてエントランスの導入展示は、無料で観覧いただけるコーナーとなった。

展示室の入り口には、「どんな小さなものでも／みつめていると／宇宙につながっている」というまどの言葉をバナーにし、天吊りした。この言葉は、「ふしぎがり」の詩人とも呼ばれたまどの詩作の姿勢をよく表していると考えている。それは、宇宙から見れば等しく小さくなる地球上のすべての存在に向かって目を凝らし、意識を同化させていく「宇宙の視点」である。まどの固定観念にとらわれることない大きな視座は、かえって小さな命や存在を拾い上げ、見落としがちな小さな幸せや、無自覚に通り過ぎてきた事柄を発見してきた。大きく引き伸ばしたまどの肖像写真パネルと合わせて、まどのまなざしを感じていただくことを企図した。また、まどの年譜と著書を展示し、次の章へつなげた。

第1章「まど・みちおの生涯」では、まず【1・幼年期】として、詩人の原点となった山口県での幼少期を紹介した。家族と離れて暮らした幼少期の孤独、祖父との交流を回想した作品「幼年遅日抄」について、書き留めたノー

トと掲載された雑誌「文藝台湾」1巻4号、1巻5号を展示した。【2・童謡詩人をこころざして】では、家族の待つ台湾へ渡り、台湾総督府に就職したまどが、本屋で児童雑誌「コドモノクニ」に掲載された童謡募集の記事を見つけた経緯を紹介した。応募した5篇のうち2篇が北原白秋選により特選となり、童謡詩人としての道を歩む端緒となった。特選の1となった詩「雨ふれば」が掲載された「コドモノクニ」第13巻14号のほか、北原白秋からの葉書を展示した。【3・戦争】では、台南安平の船舶工兵隊入隊当初からの日誌2冊のほか、軍事郵便の葉書を利用して作ったノート3冊、短詩の手作りミニノート5冊を展示した。日誌は、昭和18年2月5日の記述を見開きにして展示した。その日の内容は、まどが手旗に疲れて五分の休みの許された一時に、目の前の戦友「コンドウ」の略帽の記名を「ウドンコ」と反対に読んだことに気付いたというもので、その後「カバの うどんこ」という詩に生きることとなった。まどの人柄の一端と、戦争という厳しい状況の中にあっても変わらず、詩人としてのまなざしが人や自然に向けられていることが伺えた。【4・編集者として】では、戦後、帰国し、児童雑誌の編集者として童謡詩人と二足の草鞋を履いていた時期の資料を展示した。特に、雑誌「新児童文化」に掲載された、まどが描いたカット原画10点については、時間をかけて観覧する方の姿が見られた。また、パネルで童謡「一ねんせいに なったら」「ドロップスのうた」の創作ノートや、童謡「ぞうさん」の創作秘話を展示し、童謡詩人としての活躍を伝えた。【5・詩人として】では、創作活動に専念するため、50歳を目前に編集者を辞したまどが、童謡詩人としてではなく詩人として活動し、評価を得た時期を取り上げた。まどが58歳のときに出版した最初の詩集『てんぷら ぴりぴり』〈大日本図書〉と、詩集のために書かれた作品の創作ノートのほか、1939年に童謡同人誌「昆虫列車」に初出の童謡「やぎさん ゆうびん」を1968年に「しろやぎさん くろやぎさん」として書き直した直筆原稿を展示した。また、「国際アンデルセン賞」のメダルや賞状など貴重な資料を展示した。また、スペインのセビリアで行われた授与式に体調不良のため出席できなかったために会場で流したスピーチの映像を上映した。

第2章「まど・みちおの絵画」では、まどが50歳代のはじめに集中して描いた抽象画28点を取り上げた。これらの抽象画はクレヨンや水彩絵の具、ボールペンなど身近な画材で描かれており、タイトルやまど自身による説明がないものも多い。自分のためだけに描いたものとして、その存在は長く隠されていた。50歳代のはじめというこの時期は、ちょうど童謡詩人から詩人への移行期にあたる。詩を作るより絵を描く方が楽しく、寝るのも忘れて没頭したという。言葉によらない絵画の非定型の楽しさを、名前や意味からも解放された世界に感じたようだ。抽象画に向き合うことで、自分が表現したいものの本質に迫ろうとしていたのだろう。まどの内面性の発露が感じられる、もうひとつの「うちゅう」である。

第3章「まど・みちおの詩と童謡」では、まどの詩や童謡を元にした絵本原画、朗読、デザインを取り上げた。絵本『ぞうさん』（こぐま社）、『ちょうちょう ひらひら』（こぐま社）より、にしまきかやこ氏の原画25点、『くまさん』（こぐま社）、『ママ だいすき』（こぐま社）より、ましませつこ氏の原画26点の展示を通し、まどの子供へ向けたやさしいまなざしを感じることができた。また、言葉の響きを大切にしたまどが自作詩を朗読する貴重な音源を使って制作した映像「まど・みちお 自作詩をよむ」と、地元富山の劇団「演人全開　血が滾ってきたぜ！」による朗読を使って制作した映像「詩の朗読の輪！」を上映した。「詩の朗読の輪！」は、「カバは こいよ」「がいらいごじてん」など、「言葉は遊びたがっている」というまどの思いを表す詩や、「ぶんちん」「つけものの おもし」など、その「存在」について思いをいたした詩などについて、劇団員が声による表現を試みた。群読であったり、独白であったり、掛け合いであったり、詩の解釈によって表現も変わる面白さがあった。「詩のデザイン」は、その詩の解釈の違いを味わうことを企図した。富山県立富山北部高等学校の情報デザイン科2年生18名に依頼し、詩1篇につき2名が、それぞれの解釈でまどの詩をデザインした。来館者アンケートで、「高校生とのコラボした企画が、とても面白かった。1つの詩を2人でというところが良かった。どちらの絵が好みか考えながら見ることができた。」という感想をいただいた。「感じ方はひとつじゃなくていい。その人が感じたいように感じてもらうのが一番いい。」という、まどの心にかなうものになったと感じている。

会場内には、ほかに「まど・みちお　一〇〇歳の頃」として、亡くなるまで詩作や絵画に取り組んだ、まどの様子を伝える映像を上映するとともに、愛用品等も展示したコーナーや、まどと生前に親交があった、阪田寛夫氏（詩人・作家）、神沢利子氏（児童文学作家）、市河紀子氏（続まど・みちお全詩集の編集者）からのメッセージと、ゆかりの品々を展示したコーナーを設けた。

なお、関連イベントで、市河紀子氏の記念講演「まどさん、まどしてる」を開催し、知られざる逸話を通して、まどの素顔について聞くことができた。また、富山県文化振興財団と連携し、「まど・みちおの童謡と絵本で遊ぼう」と題し、小学校低学年までの親子を対象に、読み聞かせのイベントを行った。ピアノ演奏やクイズもあり、楽しい時間を過ごしていただくことができた。一方で、新型コロナウィルス感染防止の観点から、「詩の朗読」イベントは残念ながら中止、関連行事「朗読と音楽の夕べ２０２１」は、会期終了後の２０２２年２月５日に延期して開催された。

会期も当初、２０２１年７月10日から９月13日の予定であったが、会期中に新型コロナウィルスに対する県独自の警戒レベルが最高の「ステージ３」に引き上げられたことに伴い、８月18日から９月12日まで臨時休館の措置がとられ、本展は10月11日まで会期を延長することとなった。

来館者アンケートでは、会期延長を喜ぶ声、「現在介護中にて、まどさんの世界を観て心をゆったりさせてもらいました。」という声などをいただいた。本展がこのコロナ拡大下に開催されたことは、意義があったといえる。

長引く行動制限がもたらす孤独感や、感染不安からくる他者への不信感、感染してしまったことによる罪悪感など、コロナ禍によって生きづらさを感じる人がさらに増えたと言われる世相の中で、まどの詩は、自己と他の存在のありのままを見つめて受け入れる大切さを伝え、閉塞感から解放する糸口となる可能性を秘めている。「まど・みちおのうちゅう」が、観覧くださった方々の心を安らげるよすがとなることを願っている。

□主な展示物

種別	資料（作品）名	作者	初出・年代	所蔵
エントランス				
パネル	【まどさんからの手紙】16点	まど・みちお		高志の国文学館
パネル	【まどさんの詩のとびら】6点	まど・みちお		高志の国文学館
パネル	まど・みちおの詩を世界に送り出す			高志の国文学館
映像	上皇后美智子さまによる詩『リンゴ』の英訳とご朗読			高志の国文学館
企画展示室内　導入				
パネル	写真（1992年 川崎市生田）			周南市美術博物館
パネル	略歴			周南市美術博物館
書籍	まど・みちお少年詩集『まめつぶうた』（理論社）	まど・みちお	1973年	周南市美術博物館
書籍	まど・みちお詩集①～⑥	まど・みちお	1975年	周南市美術博物館
書籍	まど・みちお少年詩集『いいけしき』（理論社）	まど・みちお	1981年	周南市美術博物館
書籍	まど・みちお少年詩集『しゃっくりうた』（理論社）	まど・みちお	1998年	周南市美術博物館
書籍	伊藤英治編『まど・みちお全詩集』（理論社）	まど・みちお	2001年	周南市美術博物館
書籍	対訳詩集『THE ANIMALS』（すえもりブックス）	詩：まど・みちお 訳：美智子 絵：安野光雅	1992年	周南市美術博物館
書籍	対訳詩集『THE MAGIC POCKET』（すえもりブックス）	詩：まど・みちお 訳：美智子 絵：安野光雅	1998年	周南市美術博物館
書籍	『ぞうのミミカキ』（理論社）	まど・みちお	1998年	周南市美術博物館
書籍	『メロンのじかん』（理論社）	まど・みちお	1999年	周南市美術博物館
書籍	まど・みちお詩集『おなかの大きい小母さん』（大日本図書）	まど・みちお	2000年	周南市美術博物館
書籍	『うめぼしリモコン』（理論社）	まど・みちお	2001年	周南市美術博物館
書籍	『でんでんむしのハガキ』（理論社）	まど・みちお	2002年	周南市美術博物館
書籍	『たったった』（理論社）	まど・みちお	2004年	周南市美術博物館

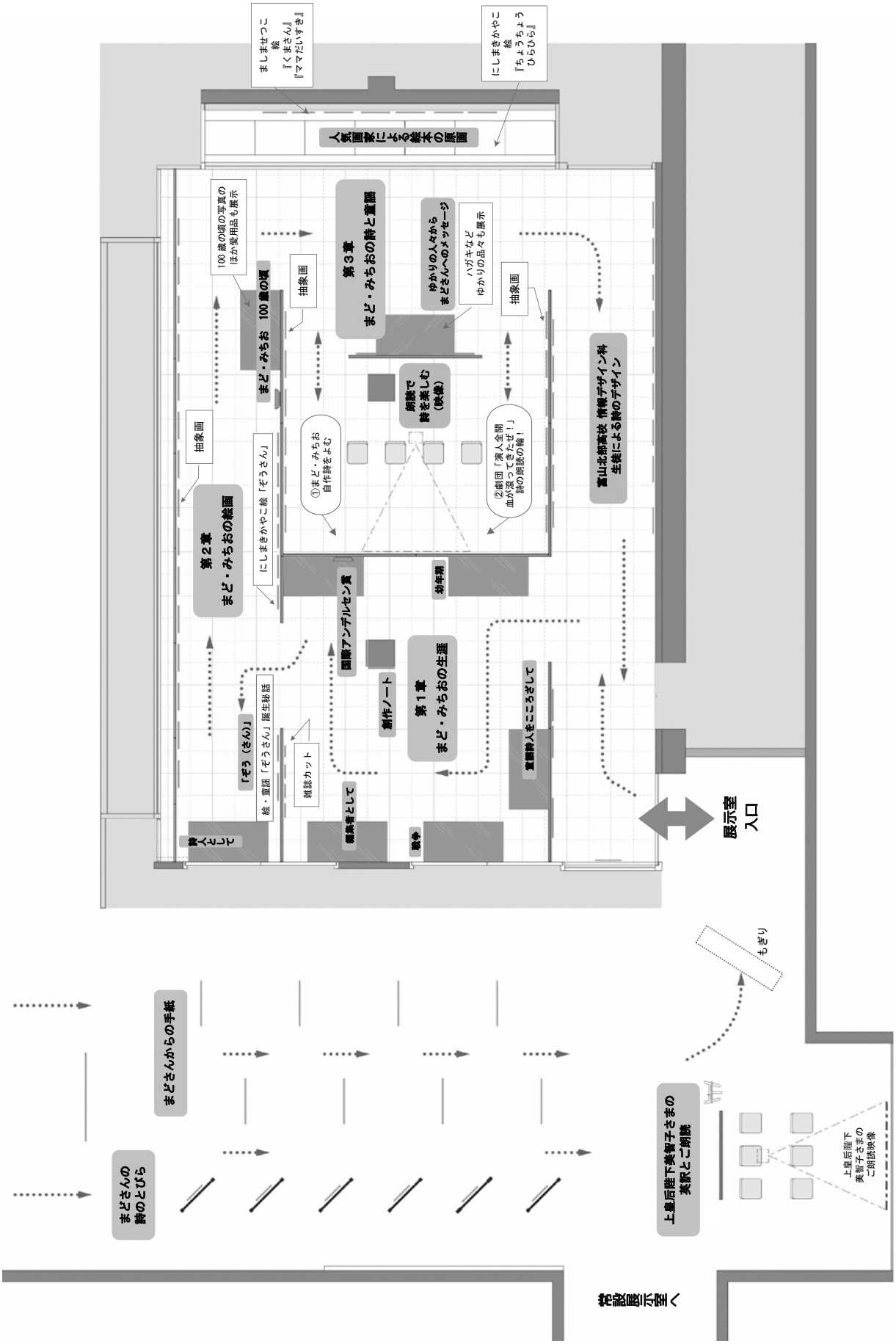
種別	資料（作品）名	作者	初出・年代	所蔵
書籍	『ネコとひなたぼっこ』（理論社）	作：まど・みちお 絵：柚木沙弥郎	2005年	周南市美術博物館
書籍	『うふふ詩集』（理論社）	まど・みちお	2008年	周南市美術博物館
書籍	『のぼりくだりの…』（理論社）	まど・みちお	2009年	周南市美術博物館
書籍	『100歳詩集　逃げの一手』（小学館）	まど・みちお	2012年	周南市美術博物館
書籍	『続まど・みちお全詩集』（理論社）	まど・みちお	2015年	周南市美術博物館
書籍	『まど・みちお画集　とおいところ』（新潮社）	まど・みちお	2003年	高志の国文学館
書籍	『絵をかいて　いちんち』（新潮社）	まど・みちお	2011年	高志の国文学館
書籍	『まど・みちお　人生処方詩集』（平凡社）	詩・絵：まど・みちお 選詩：市河紀子	2012年	個人
書籍	『くうき』（理論社）	詩：まど・みちお 画：ささめやゆき	2011年	個人
書籍	『まどさんからの手紙　こどもたちへ』（講談社）	著：まど・みちお 絵：ささめやゆき	2019年	個人
書籍	『降りつむ　皇后陛下美智子さまの英訳とご朗読』（毎日新聞社出版）	監：宮内庁侍従職 編：毎日新聞出版	2019年	個人
書籍	『いわずにおれない』（集英社）	まど・みちお	2020年	個人
第1章　まど・みちおの生涯				
パネル	解説【1．幼年期】			周南市美術博物館
パネル	写真（1912年 3歳の頃）			周南市美術博物館
パネル	写真（1916年 祖父・正敏と）			周南市美術博物館
パネル	詩「ヒガンバナ」	まど・みちお		周南市美術博物館
直筆ノート	幼年選日抄ノート	まど・みちお		個人
雑誌	文藝台湾1巻4・5号（台湾文藝協会）		1940年	周南市美術博物館
パネル	解説【2．童謡詩人をこころざして】			周南市美術博物館
パネル	写真（北原白秋）			周南市美術博物館
パネル	写真（台北工業時代）			周南市美術博物館
パネル	写真（1935年 家族とともに）			周南市美術博物館
パネル	「コドモノクニ」掲載創作募集記事			周南市美術博物館
雑誌	コドモノクニ　第13巻第14号（東京社）		1934年	周南市美術博物館
直筆ノート	創作ノート（1941年7月～）	まど・みちお	1941年	個人
葉書	北原白秋からの葉書	北原白秋	1939年	個人
パネル	解説【3．戦争】			周南市美術博物館
パネル	写真（1943年 出征前日）			周南市美術博物館
直筆ノート	戦中日誌　2冊	まど・みちお		個人
直筆ノート	軍事郵便の葉書を利用して作ったノート　3冊	まど・みちお		個人
直筆ノート	短詩の手作りミニノート　5冊	まど・みちお		個人

種別	資料（作品）名	作者	初出・年代	所蔵
パネル	解説【4．編集者として】			周南市美術博物館
パネル	写真（1949年 編集者時代） 土門拳撮影			周南市美術博物館
パネル	エピソード「編集者時代をふりかえる」			周南市美術博物館
雑誌	チャイルドブック　第23巻第1号（国民図書刊行会）			周南市美術博物館
直筆ノート	コドモノクニ編輯日記	まど・みちお		個人
原画	「新児童文化」カット　10点	まど・みちお		周南市美術博物館
パネル	まど・みちおの創作ノート　2点			周南市美術博物館
パネル	解説【5．詩人として】			周南市美術博物館
パネル	写真（1968年 野間文芸賞受賞）			周南市美術博物館
直筆ノート	創作ノート　7冊			個人
直筆ノート	へりくつノート　3冊			個人
書籍	まど・みちお詩集『てんぷら　ぴりぴり』（大日本図書）	まど・みちお	1968年	周南市美術博物館
原稿	詩「やぎさん　ゆうびん」			個人
パネル	国際アンデルセン賞について			周南市美術博物館
映像	授与式でのビデオスピーチ		1994年	JBBY
実物	1994年度国際アンデルセン賞賞状・メダル、記念杯			個人
第2章　まど・みちおの絵画				
絵画	ぞう（さん）（複製）	まど・みちお	1977年	周南市美術博物館
パネル	エピソード「ぞうさん」の誕生秘話			周南市美術博物館
絵画	石	まど・みちお	1961年	周南市美術博物館
絵画	はにわ	まど・みちお	1961年	周南市美術博物館
絵画	赤いりんかく	まど・みちお	1961年	周南市美術博物館
絵画	少女の顔	まど・みちお	1961年	周南市美術博物館
絵画	菜食主義者に風がふく	まど・みちお	1961年	周南市美術博物館
絵画	五月の風	まど・みちお	1961年	周南市美術博物館
絵画	うお	まど・みちお	1961年	周南市美術博物館
絵画	落下	まど・みちお	1961年	周南市美術博物館
絵画	えんぴつ	まど・みちお	1961年	周南市美術博物館
絵画	亀裂	まど・みちお	1961年	周南市美術博物館
絵画	雨の日	まど・みちお	1961年	周南市美術博物館
絵画	赤ちゃんのいる家	まど・みちお	1961年	周南市美術博物館
絵画	川のある町	まど・みちお	1961年	周南市美術博物館
絵画	林の道　鳥の歌	まど・みちお	1961年	周南市美術博物館
絵画	虫の町	まど・みちお	1961年	周南市美術博物館

種別	資料（作品）名	作者	初出・年代	所蔵
原画	絵本『ぞうさん』原画　12点	にしまきかやこ		個人
映像	映像でふりかえるまど・みちお（5分×2本）			周南市美術博物館
パネル	写真（100歳の頃）　2点			周南市美術博物館
直筆ノート	100歳のころのスケッチブック	まど・みちお		個人
実物	100歳のころの画材（色鉛筆、サインペン、定規など）			個人
絵画	100歳のころ描いた絵画（複製）　2点	まど・みちお		個人
第3章　まど・みちおの詩と童謡				
原画	絵本『くまさん』原画　14点	ましませつこ		個人
原画	絵本『ママだいすき』原画　12点	ましませつこ		個人
原画	絵本『ちょうちょう　ひらひら』原画　13点	にしまきかやこ		個人
パネル	メッセージ（阪田寛夫、神沢利子、市河紀子）			周南市美術博物館
葉書	葉書　2枚　まどさんから市河紀子さんへ	まど・みちお	1992、1993年	個人
書籍	『まどさん』（新潮社）	阪田寛夫	1985年	個人
葉書	葉書　5枚　まどさんから神沢利子さんへ	まど・みちお	1965、1988、1991、1996、2003年	個人
書籍	『牧野植物図鑑』	牧野富太郎		周南市美術博物館
雑誌	こどものせかい7月号（至光社）		1982年	周南市美術博物館
絵画	紙は哀しい	まど・みちお	1961年	周南市美術博物館
絵画	隣家の喪	まど・みちお	1962年	周南市美術博物館
絵画	三人のバレリーナ	まど・みちお	1962年	周南市美術博物館
絵画	ペケの界隈	まど・みちお	1963年	周南市美術博物館
絵画	風のネックレス（複製）	まど・みちお	1964年	周南市美術博物館
絵画	壁面	まど・みちお	1964年	周南市美術博物館
映像	「まど・みちお 自作詩をよむ」	まど・みちお	2021年	高志の国文学館
映像	「詩の朗読の輪！」	劇団「演人全開 血が滾ってきたぜ！」	2021年	高志の国文学館
絵画	キリン（複製）	まど・みちお	1977年	周南市美術博物館
絵画	気流圏	まど・みちお	制作年未詳	周南市美術博物館
絵画	くの字形	まど・みちお	制作年未詳	周南市美術博物館
絵画	（タイトルなし）	まど・みちお	制作年未詳	周南市美術博物館
絵画	（タイトルなし）（未完）	まど・みちお	制作年未詳	周南市美術博物館
絵画	（タイトルなし）	まど・みちお	制作年未詳	個人

種別	資料（作品）名	作者	初出・年代	所蔵
デザイン	まど・みちお　詩の宇宙　28点	富山北部高等学校情報デザイン科生徒	2021年	富山県立富山北部高等学校

□企画展示室平面図


ましませつこ
絵
『くまさん』
『ママだいすき』
にしまきかやこ
絵
『ちょうちょう
ひらひら』
人気画家による絵本の原画
100歳の頃の写真の
ほか愛用品も展示
まど・みちお　100歳の頃
抽象画
第3章
まど・みちおの詩と童謡
ゆかりの人々から
まどさんへのメッセージ
ハガキなど
ゆかりの品々も展示
抽象画
朗読で
詩を楽しむ
（映像）
①まど・みちお
自作詩をよむ
②劇団「演人全開
血が湧いてきたぜ！」
詩の朗読の輪！
富山北部高校 情報デザイン科
生徒による詩のデザイン
抽象画
第2章
まど・みちおの絵画
にしまきかやこ絵「ぞうさん」
国際アンデルセン賞
幼年期
第1章
まど・みちおの生涯
創作ノート
童謡詩人をこころざして
「ぞう（さん）」
絵・童謡「ぞうさん」誕生秘話
雑誌カット
編集者として
戦争
鈴木三重吉
展示室
入口
もぎり
まどさんからの手紙
まどさんの
詩のとびら
上皇后陛下美智子さまの
英訳とご朗読
上皇后陛下
美智子さまの
ご朗読映像
常設展示室へ

（3）企画展
「太宰治　創作の舞台裏 展」

永井　清

二〇一九年、日本近代文学館において、特別展「生誕一一〇年　太宰治　創作の舞台裏」が開催された。展示は東京大学教授の安藤宏氏の編集による。安藤氏は編集にあたって、過去の太宰展との重複を避けるため、思い切って「資料に見る創作の舞台裏」という一点に焦点を絞ることにしたと述べている。太宰治の生涯をたどったり、活動した地域との関係に力点を置いたりするのではなく、あくまでも残された「資料」それ自体に主役になってもらうことに意が注がれている。展示が資料の性格別に組まれており、これらを読み解く面白さを通じて、作品の生み出される創造の機微に触れられるようになっている。今回の企画展はこの展示資料を中心として高志の国文学館での展覧会として計画されたものである。太宰の作品に対する知識がそれほどない方にも楽しんでいただけるよう、作品解説を適宜加えたり、見て楽しめる資料を加えたりするなどの工夫を取り入れた。

展示の全体像は、1 当館オリジナルの導入展示、2 安藤宏氏の編集による「太宰治　創作の舞台裏」、3 三鷹市からの借用資料の展示、4 原稿筆写体験、太宰作品の朗読劇のゾーンに大別される。2の部分については展示資料の性質と編集者の意図を正確に表すよう、適宜安藤氏の説明を引用しながら解説する。

まず、1の導入展示では「太宰文学入門・太宰文学再入門」と題して、作品紹介を行った。「富嶽百景」「駈込み訴へ」「津軽」「新釈諸国噺」「お伽草紙」「トカトントン」「斜陽」「人間失格」の著名な八作品について、作品の一節の引用、簡単なあらすじ、解説をパネルにして展示した。太宰治の作品世界に触れたことのない方、また、読んだ経験から時間の経過した方にも作品世界を知ってもらったり、振り返っていただいたりしていただくことを狙いとした。さらに「新たな太宰文学との出会い」と題して、「黄金風景」「満願」「女生徒」「新樹の言葉」「葉桜と魔笛」「走れメロス」の六作品についてパネル展示をした。「黄金風景」「満願」「女生徒」の三作品についてはブースを設け、作品の一節を朗読と映像で紹介した。もとよりこれらの作品が太宰の新たな作品というわけではない。いずれも太宰に対して持たれている、暗く神経質なイメージとは対照的な、明るく家庭的な愛情にあふれる作品として紹介したものである。複数の作品による作品群として紹介することで、太宰の新たな世界を知っていただくことを狙いとした。

続いて2の「太宰治　創作の舞台裏」は本企画展の核となる。全体は安藤氏によって六部に分けて編集された。

第一部「『太宰治』のルーツ」は「津島家」「習作時代」の二つの部分からなる。太宰と生家との関係はその後の分家除籍等の事情や太宰自身の生や作品への影響を考えるうえで非常に重要な意味を持つ。「津島家」では太宰の作品「思ひ出」の、父の死にまつわる一節を引用して紹介し、父の葬式をただ「美しい」ととらえていた太宰の心理を強調して紹介した。「習作時代」では「蜃気楼」「青んぼ」「細胞文芸」等の同人誌に加えて高校時代の英作文、課題作文も展示。「蜃気楼」一九二六（大正十五）年六月号に掲載された「蜃気楼同人諸価値表」は内容の面白さから注目された資料であった。これは「文芸春秋」一九二四（大正十三）年十一月号の「文壇諸家価値調査票」をまねて太宰が作成したものといわれ、そのことからも太宰の中央文壇志向がうかがえるものである。

第二部「ノート・落書きを中心に」の「中学・高校時代のノート」で多くの人が注目するのはノートに書きこまれたおびただしい数の落書きである。強烈なタッチで描かれる人物像、とりわけ自画像とおぼしき顔の絵が多いことに注目され、太宰の「顔」に対する特別な意識が感じ取れる。また展示の「地鉱」（自然科学・地理学習ノート）に書かれた芥川龍之介の名前を書き連ねた部分や、その名のパロディのペンネームと思われる「小川麟一郎」のサインを書き連ねた部分から芥川龍之介への傾倒ぶりをうかがわせて面白い。

第三部「原稿・書き換えの跡をたどる」は「活字にならなかったもう一つの世界」「未定稿から完成稿へ」の二つからなる。日本近代文学館「太宰治

文庫」には、使っていたリンゴ箱から美知子夫人がはがして調査した反故原稿なども含まれている。資料保存への強い思いがあったからこそ、現在触れることのできる非常に貴重な資料である。『井伏鱒二選集』（筑摩書房、一九四八（昭和二十三）年三月）に関する展示では太宰の師、井伏の選集に関して二人の意見の対立がうかがえる。井伏の作品をなるべく多く収録したいと考える太宰に対し、井伏は頑固に反対し、「駄作はこの選集から絶対に排除しなければならぬ」（太宰治「第二巻後期『井伏鱒二選集』第二巻」）と意見が異なり、大幅に削減していることが分かる資料であった。

第四部「典拠・小説に用いた資料」では「富嶽百景」「天狗」「不審庵」「右大臣実朝」「惜別」の五つの作品についての取材の在り方をめぐる資料を展示した。小説家は執筆にあたって素材の調査、取材活動を行うことが知られている。太宰の場合は、例えば「富嶽百景」の有名な冒頭部分は義父の石原初太郎氏の著作『富士山の自然界』を転用したもので表現は酷似している。太宰の取材に対する貪欲な姿勢がうかがえた。また「惜別」の執筆にあたっては、仙台医学専門学校留学時の魯迅を取材した小説のために、魯迅の足跡を追って仙台を訪れて取材した。その際に用いた地図『最新版番地入　仙台市明細地図』を展示した。太宰は河北新報社を訪れ、作品に関する記事を三日間にわたって休まずにメモし続けたというが、そのメモも展示した。

第五部「戦争の影」は「花火」「佳日」「小さいアルバム」「冬の花火」「パンドラの匣」の作品に戦争が及ぼした影響、中でも検閲の影響について確認できる資料を展示した。太宰の文学活動は戦中戦後の激動の時代に重なる。戦中は内務省、戦後はＧＨＱの検閲を受けた。展示資料の一つ「返事の手紙」は、作家、貴司山治との往復書簡として「東西」一九四六（昭和二十一）年五月号に発表されたものである。この中で小説を書きなおさなければならなかったことへの心情を述べている。

今回の展示資料の中で最も貴重なものは「お伽草紙」の完全原稿である。「瘤取り」「浦島さん」「カチカチ山」「舌切雀」の四つの昔話をもとに太宰が書き上げたものであり、作品そのものとしても痛快な面白さを含み持つ作品である。太宰は疎開先の甲府の家が空襲で全焼する中、「お伽草紙」の原稿を手に携えて避難した。その原稿は作品の発表から七十年の月日を経て発見された貴重なものである。展示は「瘤取り」の書き換えの経緯がよく分かるようになっている。初版、再版、異版での記述の違いが確認できる展示であり、終戦直後のあわただしい中での書き換えの経緯が確認できる。

第六部「斜陽」と「人間失格」では、晩年の代表作の二作について草稿と完成稿の比較を行った。作品の構想が変化し、細かな表現一つにも書き悩んでいることが確認できる。「人間失格」の「第三の手記」冒頭では現在知られている定稿とは異なる書き出し原稿を展示。大きな×印で反故にしていることが分かる。「世間。どうやら自分にも、それがぼんやりわかりかけて来たやうな気がしてゐました。」という有名な個所ではその表現に落ち着くまでに細かな助詞の一つにまで推敲を重ねており、その一文がまた新たな意味を帯びて印象深いものとなる資料である。

三鷹市から借用した資料の中心は、三鷹市に寄託されている「山内祥史文庫」である。故・山内祥史氏は、太宰治研究に生涯を捧げた研究者で、その所蔵品の多くが三鷹市に寄託されている。今回は「太宰　治　初版本コレクション」として、二十八冊を一つのケースに収めて展示した。地方での展示数としては非常に貴重な機会であり、それぞれに個性的な装丁を楽しむことができた。また「川端康成宛書簡」（複製）を展示。これは昭和十一年六月二十九日に書かれた、いわゆる「泣訴状」として知られ、第一回の芥川賞受賞を逃した太宰が同賞の選考委員であった川端に受賞を懇願した手紙である。太宰の芥川賞への執着ぶりが時代を経てもありありと伝わってくる。

企画展示室内では朗読劇「走れメロス」を映像で紹介、また、畳敷きのスペースに文机を配置し、太宰の自筆原稿を模写する体験コーナーも設けた。

太宰治への高い人気ぶりが改めて認知される企画展となった。中・高校生や大学生を含む若い年齢層に多く観覧いただき、当館を初めて訪れた人も多かった。今後の企画展の在り方を考えるうえで大変に参考となる機会となった。

本企画展開催に関してご協力いただいた関係各位にこの場を借りて改めて感謝申しあげます。

□主な展示物

種別	資料（作品）名	作者	所蔵提供
図書	『金木郷土史』（金木町役場、1940（昭和15）年）	—	日本近代文学館太宰治文庫
図書	津島美知子『回想の太宰治』（人文書院、1978（昭和53）年）	津島美知子	日本近代文学館
ノート	美知子夫人　津軽取材ノート	津島美知子	日本近代文学館太宰治文庫
印刷物	「青んば」2号表紙刷りだし	—	日本近代文学館太宰治文庫
自筆文書	英作文「KIMONO」	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
自筆文書	英作文「A very brief history of his first half life」	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
自筆文書	英作文「我が国の人口問題」	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
日記	「新文芸日記」（太宰治日記・1926（大正15）年1月）	—	日本近代文学館太宰治文庫
雑誌	「最近文士録」（「文芸公論」1928（昭和3）年1月号）	—	日本近代文学館
雑誌	「蜃気楼」1926（大正15）年6月号	—	日本近代文学館太宰治文庫
雑誌	「蜃気楼」1926（大正15）10月号	—	日本近代文学館太宰治文庫
雑誌	「細胞文芸」1928（昭和3）年5月創刊号	—	日本近代文学館太宰治文庫
雑誌	「細胞文芸」1928（昭和3）年7月号	—	日本近代文学館太宰治文庫
ノート	「細胞文芸」表紙スケッチ（「地鉱」ノート）	—	日本近代文学館
雑誌	「座標」1930（昭和5）年1月創刊号	—	日本近代文学館
ノート	「国文漢文草稿帳」（国語・漢文学習ノート）	太宰治	日本近代文学館
教科書	『A modern symposium』（英語教科書）	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
ノート	「The Professor」（英語読解学習ノート）	太宰治	日本近代文学館
ノート	「地鉱」（自然科学・地理学習ノート）	太宰治	日本近代文学館
自筆文書	中学時代の習字とらくがき	太宰治	日本近代文学館
文書	「修治ニ関スル重大書類」（高面順三あて覚書）	高面順三	＊中畑慶吉保管文書
絵葉書	心中の場所を示した絵はがき	—	＊中畑慶吉保管文書
新聞	心中事件記事（「東奥日報」1930（昭和5）年11月30日）	—	＊中畑慶吉保管文書
自筆文書	婚約者・小山初代に宛てた遺書	太宰治	＊中畑慶吉保管文書

種別	資料（作品）名	作者	所蔵提供
文書	船橋薬局パビナール購入簿	—	日本近代文学館太宰治文庫
文書	美知子夫人「パビナール購入簿に関するレポート」	津島美知子	日本近代文学館太宰治文庫
雑誌	「斜陽」連載第2回（「新潮」1947（昭和22）年8月号）	太宰治	日本近代文学館
草稿	「HUMAN LOST」草稿断片	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
草稿	「火の鳥」草稿	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
草稿	「カレツヂ・ユーモア・東京帝国大学の巻」草稿	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
草稿	「悖徳の歌留多」草稿	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
構想メモ	「善蔵を思ふ」封筒に書き留めた構想メモ	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
草稿	「如是我聞」草稿	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
構想メモ	「如是我聞」構想メモ（晩年の手帖）	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
草稿	『井伏鱒二選集』草案1	—	日本近代文学館太宰治文庫
草稿	『井伏鱒二選集』草案2	—	日本近代文学館太宰治文庫
図書	『井伏鱒二選集』（筑摩書房、1948（昭和23）年）	—	日本近代文学館
切抜	「天狗」（「みつこし」1942（昭和17）年9月）	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
図書	伊藤松宇校訂『芭蕉七部集』（岩波文庫、1927（昭和2）年）	松尾芭蕉他	日本近代文学館太宰治文庫
図書	石原初太郎「富士山の形態」（「富士山の自然界」山梨県、1925（大正14）年）	石原初太郎	日本近代文学館太宰治文庫
雑誌	「富嶽百景」（「文体」1939（昭和14）年2月）	—	日本近代文学館
図書	堀内正路『千家正流茶の湯客の心得』（仁木文八郎、1884（明治17）年）	堀内正路	日本近代文学館太宰治文庫
雑誌	「不審庵」（「文芸世紀」1943（昭和18）年10月）	—	日本近代文学館
図書	「石大臣実朝」（錦城出版社、1943（昭和18）年）	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
雑誌	「源実朝年譜」（「鶴岡」1942（昭和17）年8月）	—	日本近代文学館太宰治文庫
図書	斎藤茂吉校訂『金槐和歌集』（岩波文庫、1929（昭和4）年）	—	日本近代文学館太宰治文庫

種別	資料（作品）名	作者	所蔵提供
原稿	「右大臣実朝」原稿	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
図書	『惜別』（朝日新聞社、1945（昭和20）年）	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
新聞	「五大宣言の小説化」（「文学報国」1943（昭和18）年11月10日）	—	不二出版発行復刻版
草稿	「『惜別』の意図」草稿	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
メモ	「惜別」メモ	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
図書	文部省音楽取調掛編『小学唱歌集』第三編（高等師範学校附属音楽学校、1884（明治17）年）	—	日本近代文学館太宰治文庫
雑誌	実藤恵秀「留日学生史談（六）」（「東亜文化圏」1944（昭和19）年3月）	実藤恵秀	日本近代文学館
地図	『最新版番地入　仙台市明細地図』（金港堂書店、1925（大正14）年）	—	日本近代文学館太宰治文庫
書簡	太宰治　竹内好宛はがき　1945（昭和20）年2月27日	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
図書	「佳日」（『佳日』肇書房、1944（昭和19）年8月）	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
図書	「佳日」（『黄村先生言行録』日本出版株式会社、1947（昭和22）年3月）	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
校正刷	「小さいアルバム」（『佳日』校正刷）	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
図書	「小さいアルバム」（『薄明』新紀元社、1946（昭和21）年11月）	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
原稿	「冬の花火」原稿	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
雑誌	「冬の花火」（「展望」1946（昭和21）年6月）	太宰治	日本近代文学館
図書	河北新報社版『パンドラの匣』（1946（昭和21）年6月）	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
図書	双英書房版『パンドラの匣』（1947（昭和22）年6月）	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
原稿	「返事の手紙」原稿	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
原稿	新発見「お伽草紙」原稿	太宰治	日本近代文学館
図書	初版『お伽草紙』（筑摩書房、1945（昭和20）年10月）	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
図書	再版『お伽草紙』（筑摩書房、1946（昭和21）年2月）	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
図書	異版『お伽草紙』（南北書園、1948（昭和23）年9月）	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
原稿	「斜陽」原稿	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫

種別	資料（作品）名	作者	所蔵提供
図書	『斜陽』（新潮社、1947（昭和22）年）	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
図書	ドナルド・キーン訳『The settings un（New Directions、1956（昭和31）年）	ドナルド・キーン	日本近代文学館太宰治文庫
原稿	佐藤俊夫新潮社元会長旧蔵「斜陽」原稿	太宰治	日本近代文学館
草稿	「斜陽」草稿	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
校正刷	「斜陽」校正刷	太宰治	日本近代文学館
草稿	「人間失格」草稿	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
原稿	「人間失格」原稿	太宰治	日本近代文学館太宰治文庫
絵画	太宰治、堤重久、秋田富子「他画他讃自讃する人もありき」（油彩画）	太宰治、堤重久、秋田富子	日本近代文学館
書	「川ぞひの路をのぼれば赤き橋またゆきゆけば人の家かな」（短冊）	太宰治	日本近代文学館
写真	父　津島源右衛門	—	日本近代文学館
写真	母　津島タ子	—	日本近代文学館
引用	太宰治「思ひ出」	—	—
写真	津島家の人びと　太宰生家の庭にて	—	日本近代文学館
写真	兄文治・英治・圭治、弟礼治とともに	—	日本近代文学館
写真	「蜃気楼」の同人たち	—	日本近代文学館
写真	弘前高等学校時代（「いい男だろ　小菅銀吉」）	—	日本近代文学館
ノート（パネル）	「東洋史」	—	渡部芳紀撮影・提供
ノート（パネル）	「物理」	—	渡部芳紀撮影・提供
ノート（パネル）	「English Dictation」	—	渡部芳紀撮影・提供
ノート（パネル）	「西洋史」	—	渡部芳紀撮影・提供
ノート（パネル）	（年代不明）	—	渡部芳紀撮影・提供
引用	津島美知子「書斎」『回想の太宰治』	—	—
ノート	「細胞文芸」表紙スケッチ（「心理学」ノート）	—	渡部芳紀撮影・提供
写真	1935（昭和10）年、船橋にて「晩年」口絵写真	—	日本近代文学館
引用	津島美知子「旧稿」『回想の太宰治』	—	—

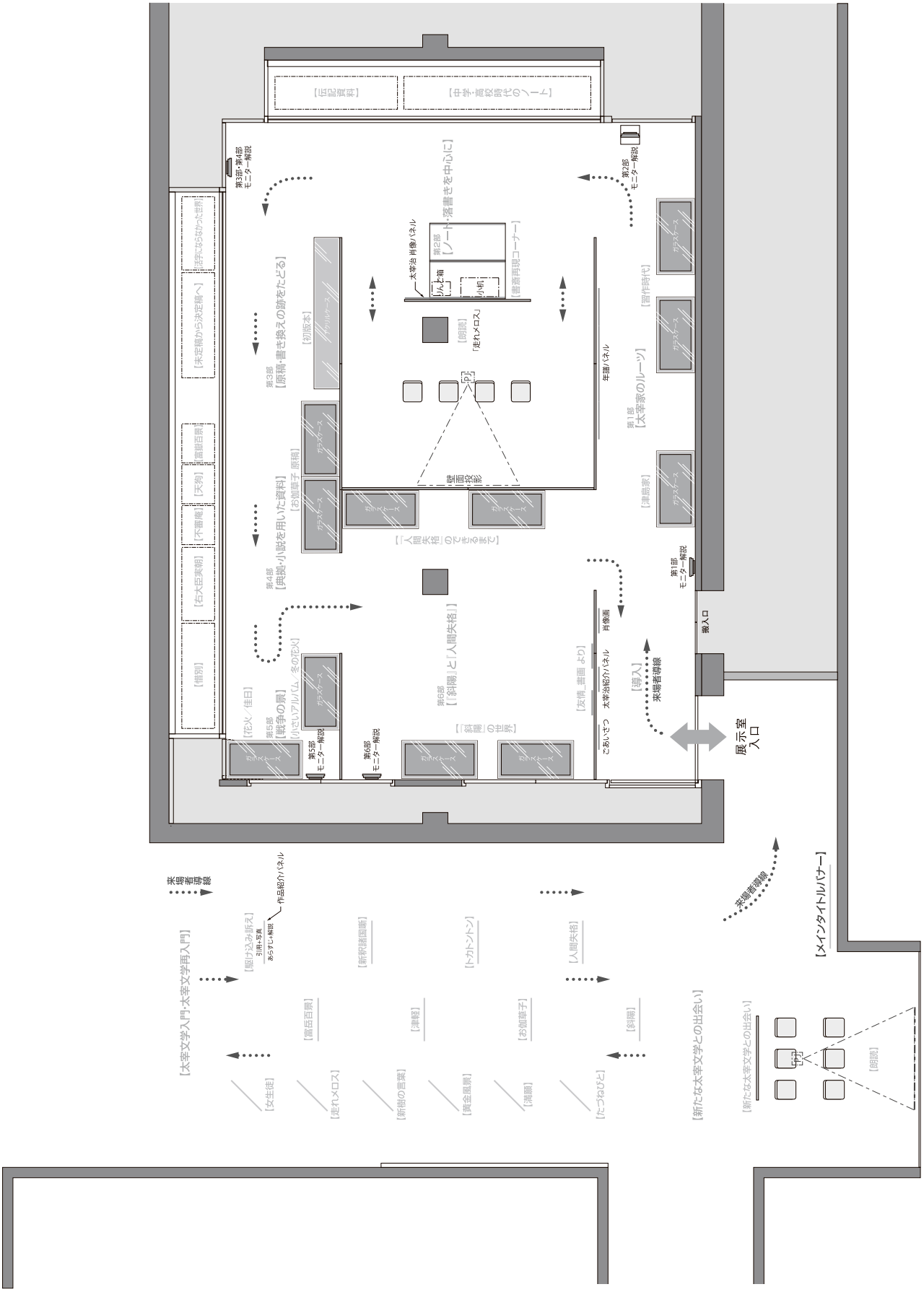
種別	資料（作品）名	作者	所蔵提供
雑誌（パネル）	「懶惰の歌留多」（「文芸」1939（昭和14）年4月）	—	日本近代文学館
原稿	黒虫俊平「ねこ」原稿	—	＊（複写資料）
雑誌（パネル）	「善蔵を思ふ」（「文芸」1940（昭和15）年4月）	—	日本近代文学館
写真	「善蔵を思ふ」の年、三鷹の自宅にて	—	日本近代文学館
引用	太宰治「後記」『井伏鱒二選集』第二巻	—	—
引用	太宰治「右大臣実朝」	—	—
写真	『右大臣実朝』発表の翌年、三鷹の自宅付近（渡辺好章撮影）	—	日本近代文学館
引用	太宰治「惜別」	—	—
雑誌（パネル）	「花火」（「文芸」1942（昭和17）年10月）	—	日本近代文学館
公文書（パネル）	「出版警察報」145号（1942（昭和17）年10月8日）	—	不二出版発行復刻版、国立国会図書館提供
引用（パネル）	津島美知子「後記」（『太宰治全集』第十一巻 創芸社、1953年）※『日本文学研究資料叢書』（有精堂出版、1970年）より引用。	—	—
図書（パネル）	武内俊子文・河目悌二画『コブトリ』（児童図書出版社、1944（昭和19）年）	—	県立神奈川近代文学館
原稿（パネル）	青森県近代文学館所蔵「お伽草紙」原稿	—	青森県立近代文学館

□三鷹市借用資料

種類	資料名等	出版年・備考等	所属先
書簡	川端康成宛書簡	複製（昭和11年6月29日）	三鷹市スポーツと文化財団
書簡	野田宇太郎宛書簡	複製（昭和20年2月13日）	三鷹市スポーツと文化財団
筆墨	書「待ち待ちてことし・・」軸	昭和16年頃	三鷹市スポーツと文化部（津島家寄託）
絵画	水仙	昭和15年頃	三鷹市スポーツと文化部（津島家寄託）
絵画	肖像　左向き	昭和22年頃	三鷹市スポーツと文化部（津島家寄託）
その他の遺品	表札	複製	三鷹市スポーツと文化財団
その他の遺品	アドレス手帳		三鷹市スポーツと文化部（津島家寄託）
その他の遺品	納税通知書	昭和23年2月25日	三鷹市スポーツと文化部（津島家寄託）
図書	思ひ出	昭和15年　人文書院	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）

種類	資料名等	出版年・備考等	所属先
図書	女の決闘	昭和15年　河出書房	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	東京八景	昭和16年　実業之日本社	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	新ハムレット	昭和16年　文芸春秋社	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	駈込み訴へ	昭和16年　月曜荘私版	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	風の便り	昭和17年　利根書房	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	老ハイデルベルヒ	昭和17年　竹村書房	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	信天翁	昭和17年　昭南書房	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	右大臣実朝	昭和18年　錦城出版	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	佳日	昭和19年　肇書房	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	愛と美について	昭和14年　竹村書房	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	八十八夜	昭和21年　南北書園	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	玩具	昭和21年　あづみ書房	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	薄明	昭和21年　新紀元社	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	道化の華	昭和22年　実業之日本社	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	猿面冠者	昭和22年　鎌倉文庫	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	姥捨	昭和22年　ポリゴン書房	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	冬の花火	昭和22年　中央公論社	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	狂言の神	昭和22年　三島書房	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	女神	昭和22年　白文社	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	太宰治随想集	昭和23年　若草書房	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	水仙	昭和23年　文芸春秋新社	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	人間失格	昭和23年　筑摩書房	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	桜桃	昭和23年　実業之日本社	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	雌について	昭和23年　杜陵書院	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	如是我聞	昭和23年　新潮社	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	地主一代	昭和24年　八雲書店	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
図書	グッド・バイ	昭和24年　八雲書店	三鷹市スポーツと文化部（山内祥史文庫）
資料	年譜（横900mm×1200mm×4枚）		三鷹市スポーツと文化財団

□企画展示室平面図


【伝記・年譜】
【中学・高校時代のルーム】
第3部・第4部 モニター解説
第2部 モニター解説
第1部 モニター解説
第3部 【原稿・書き換えの跡をたどる】
【初版本】
第2部 【ノート・落書きを中心に】
太宰治 肖像パネル
りんと箱
小机
【書斎再現コーナー】
【朗読 「走れメロス」】
壁面投影
年譜パネル
第1部 【太宰家のルーツ】
【習作時代】
【津島家】
【お伽草子 原稿】
【「人間失格」のドキュメント】
第4部 【典拠・小説を用いた資料】
【右大臣実朝】
【不審庵】【天狗】
【金木・五所川原】
【不定稿から決定稿へ】
【評伝にならなかった世界】
【借別】
【花火／佳日】
第5部 【戦争の景】
【小説アルバム 冬の花火】
第5部 モニター解説
第6部 モニター解説
第6部 【「斜陽」と「人間失格」】
【「斜陽」の世界】
【友情 書簡 より】
肖像画
太宰治紹介パネル
ごあいさつ
【導入】
来場者導線
搬入口
展示室 入口
来場者導線
作品紹介パネル
【太宰文学入門・太宰文学再入門】
【掘り込み折え】
引用・写真
あらすじ・解説
【新秋語国断】
【トカトントン】
【人間失格】
【富岳百景】
【津軽】
【お伽草子】
【斜陽】
【女生徒】
【走れメロス】
【新潮の言葉】
【黄金風景】
【清貧】
【たづねびと】
【新たな太宰文学との出会い】
【新たな太宰文学との出会い】
【朗読】
【メインタイトルバナー】

（4）企画展
「個性きらめく富山の女性作家たち展」
（第1期　時代を切り開く）

綿引　香織

令和4年1月から6月にかけて開催した本展は、第1期（1月16日～3月21日）と第2期（3月30日～6月6日）で大きく内容が分かれている。本稿ではそのうち、女性の社会進出が十分に進んでいなかった明治・大正・昭和初期の時代から、富山の女性文学発展の礎を築く先駆的な活躍をした4人の作家（小寺菊子、富本一枝、澤田はぎ女、方等みゆき）をとりあげた第1期「時代を切り開く」について、展示概要を述べていきたい。

第1章「新しい女性の生き方を模索する」では、小寺菊子（小説・随筆）と富本一枝（随筆・児童文学）を紹介した。

富山の女性職業作家のパイオニア・**小寺菊子**（1879～1956）は、本名をキクといい、明治12年、売薬業を営む尾島英慶の次女として上新川郡富山旅籠町（現富山市）に生まれた。父の投機失敗からの服役、祖母と母の不仲など悩みの多い少女期を送り、明治28年（1895）に上京して女学校に通うも、父の死で学資が続かなくなり断念。郷里から家族を呼び寄せ、さまざまな仕事で家計を支えた。明治36年（1903）には、秋香女史の筆名で『新著文芸』に「破家（やれや）の露」を発表。やがて尾島菊子名で発表した少女小説でも活躍。徳田秋聲のもとに弟子入りし、「妹の縁」「赤坂」などで注目を集め、明治44年（1911）、『大阪朝日新聞』の懸賞小説に「父の罪」が入選し、文壇での地位を築いた。また、日本の女性解放運動の先駆となる『青鞜』に最初期から参加。大正3年（1914）に洋画家の小寺健吉と結婚。大正7年（1918）に与謝野晶子らと女性洋画家を集めた「朱葉会（しゅようかい）」を創設し、女性画壇の発展にも寄与した。徳田秋聲門下第一の女性作家として、同人文芸誌『あらくれ』で活躍。昭和22年（1947）に発表した「思ひ出を辿（たど）りて」が絶筆となり、昭和31年（1956）、77歳で死去。

「少女小説の世界へ」のコーナーでは、菊子の最初期の投稿作品や少女小説が掲載された当時の雑誌、作品集を展示。「小説家としての活躍」のコーナーでは、師・徳田秋聲による書簡や、菊子の自筆原稿、「河原の対面」などさまざまな小説が掲載された雑誌、出世作となった『父の罪』の単行本などを展示した。「文壇に地位を築く」のコーナーでは、菊子が著名作家の1人として取り上げられている『四十大家現代女性観』や、立志伝中の人として紹介されている『大正婦人立志傳』などを紹介。また、「自らの半生を語る」のコーナーでは、青春時代の苦労を語ったアンケートはがきや、翁久允宛の自筆履歴書、随筆作品などを紹介した。「ふるさと富山の思い出」のコーナーでは、富山で過ごした少女期や、大人になって帰郷した際のことを語った随筆、祖母をモデルにした小説「他力信心の女」などを紹介した。「小寺菊子と朱葉会」のコーナーでは、会の発足を伝える当時の新聞や、菊子の絵画作品等をパネルで紹介した。

女性と子どものための信念を貫いた人・**富本一枝**（1893～1966）は、明治26年、日本画家・尾竹越堂（国一）の長女として富山市越前町に生まれた。小学校入学まで富山で過ごし、東京の小学校へ入学、のちに一家で大阪に移住した。東京の女子美術学校（現女子美術大学）で日本画を学び、やがて巽画会展などに日本画を出品。18歳の時、寄寓先で「青鞜」の存在を知り、明治45年（1912）に平塚らいてうの青鞜社に入社。尾竹紅吉の筆名で詩や随筆等を発表し、表紙絵を描く。しかし、「五色の酒事件」「吉原登楼事件」で新聞に「新しい女」の中心人物と書き立てられ、責任を取る形で同年10月に退社。大正3年（1914）、神近市子や松井須磨子らと文芸演劇雑誌『番紅花（サフラン）』を創刊（6号まで刊行）。同年に陶芸家の富本憲吉と結婚し、以後は夫の制作活動を支えながら、婦人雑誌などに随筆や小説、評論を発表した。戦後は俳人の中村汀女をたすけて句誌『風花』を創刊し、児童図書の出版社「山の木書店」を経営。昭和26年（1951）から『美しい暮しの手帖』（のち『暮しの手帖』）に13年間連載した童話は、一枝の没後に『お母さんが読んで聞かせるお話』A・Bとして刊行された。昭和41年（1966）、73歳で死去。

「画家・装丁家として」のコーナーでは、画家として出発した一枝の絵画「弾琴」（部分）や、装丁を担当した書籍、表紙絵を描いた雑誌『青踏』などを展示。あわせて、画家である父越堂の手がけた売薬版画や、尾竹家の写真なども紹介した。「青踏の「尾竹紅吉」として」のコーナーでは、一枝の作品が載る『青踏』や当時の写真、一枝たち社員の挙措を報じる新聞記事などを展示した。「文学への情熱」のコーナーでは、一枝が主宰した文芸演劇雑誌『番紅花』全冊や、小説・随筆・評論が掲載された雑誌、編集に携わった中村汀女の句誌『風花』などを紹介した。また、結婚式で身に着けた花嫁衣裳（絵柄は父越堂作）や家族写真、自筆資料など、人となりを伝える貴重な資料も展示した。「童話と児童教育への情熱」のコーナーでは、一枝が経営した児童図書の出版社・山の木書店の出版物や、一枝の童話作品を長年掲載していた雑誌「暮しの手帖」などを展示した。また、晩年の一枝の境地を示す書画や写真も紹介した。

第2章「詩歌に新しい風をもたらす」では、澤田はぎ女（俳句）、方等みゆき（詩・短歌）を紹介した。

明治期に彗星のごとく現れた女性俳人・**澤田はぎ女**（１８９０～１９８２）は、明治23年、長沢幸次郎の次女として富山県西砺波郡西五位村三日市（現高岡市福岡町）に生まれた。本名はつい（初枝）。福岡小学校高等科在学中に、校長・長谷川定則の薫陶を受ける。明治39年（１９０６）、銀行員の澤田彌太郎（俳号「岳楼」）と結婚。夫の指導のもと俳句を作るようになり、越友会の寺野守水老（しゅすいろう）の添削を受ける。俳号「はぎ女」。翌年から『ホトトギス』や「国民俳壇」などに投句を始め、入選を重ねるにつれて俳壇で注目を集める。明治42年（１９０９）には、女性初の『ホトトギス』雑詠巻頭となった。当時の俳壇における主要な句集に、はぎ女の句は６００以上収録されているという。大正2年（１９１３）を最後に句作から遠ざかったため、その後夫による代作説がささやかれたが、昭和32年（１９５７）、俳人の池上不二子によってはぎ女の実在が証明されてようやく復権を果たした。昭和38年（１９６３）に刊行された『はぎ女句集』には、はぎ女自身が序文を記している。昭和57年（１９８２）、92歳で死去。

最初のコーナーでは、小学校時代の画帳、手作りの文箱や手毬などを展示し、手先が器用だったはぎ女の人となりを紹介した。「女性俳人として」のコーナーでは、自筆の短冊、書のほか、はぎ女の句が掲載された国民新聞や『葦附』『文庫』などの雑誌、句への批評が載る『ホトトギス』などを展示。「俳句選者からはぎ女への書簡」のコーナーでは、著名俳人たちがはぎ女にあてた書簡により、当時のはぎ女への注目度を紹介した。なかでも、俳句の師・松根東洋城からの書簡は、思うように句作の時間が取れないはぎ女への思いやりにあふれた内容となっている。「俳人はぎ女架空説（代作説）からの復権」のコーナーでは、はぎ女は実在しないとの説を掲載した当時の俳句雑誌と、のちにはぎ女の名誉回復のきっかけを作った池上不二子の著書を紹介し、晩年に刊行された『はぎ女句集』を展示した。

富山に女性詩の黎明を告げた詩人・**方等みゆき**（１８９６～１９５８）は、明治29年、射水郡長などを務めた高松覚太郎の長女として射水郡新湊町（現射水市）に生まれる。本名は翠。京都府立第一高等女学校を卒業後、結婚して神戸に住むが、外国航路の航海士だった夫がドイツで病死。遺児と共に高岡に帰郷し、高岡市立高等女学校の国語教師となる。仕事の傍ら詩作に励み、昭和４年（１９２９）頃から『日本海詩人』に方等深雪の名で詩を投稿。翌年には『高岡新報』の懸賞文芸詩部門で一位に入選するなど、高い評価を得る。佐藤惣之助主宰の『詩之家』などにも作品を発表。昭和６年（１９３１）に「女人詩社」を結成し、女性詩人による詩誌『女人詩』を創刊主宰。女性詩人の作品発表と交流の場を設けて後進を育てると同時に、永瀬清子、深尾須磨子、竹内てるよらとも活発に交流。昭和９年（１９３４）には、第一詩集『しんでれら』を刊行。昭和12年（１９３７）の『女人詩』休刊後は、作品の発表数が減少。戦後は東京に転居し、昭和33年（１９５８）、62歳で死去。

「詩人としての出発」のコーナーでは、初期の詩が載る『日本海詩人』や『女人芸術』などの雑誌のほか、『高岡新報』の懸賞文芸詩欄をパネルで紹介した。「『女人詩』の創刊」のコーナーでは、前身となったガリ版刷の雑誌『女人』や『日本海詩人　女人号』を紹介し、方等が主宰した詩誌『女人詩』全20号を一堂に展示した。また、女人詩社から出された詩集や、方等みゆき自身の詩集『しんでれら』を展示した。「方等みゆきが参加した詩誌・歌誌・文芸誌」のコーナーでは、方等が詩を掲載した『詩之家』『麺麭』などの詩誌、合同

詩集、交流のあった作家や詩人の書簡、詩集などを紹介した。「方等みゆきその後」のコーナーでは、不明な点が多い戦後の活動をうかがわせる資料として、深尾須磨子が方等にあてた書簡、戦後の詩を載せる『新詩人』などを紹介した。なお、本展の期間中、方等の詩を富山県立呉羽高等学校の書道部の皆さんが大書した作品を回廊コーナーに展示した。

あわせて、**回廊展示**「今をはばたく富山の女性作家たち」についてもふれておく。ここでは、現在活躍中の詩人・池田瑛子、尾山景子、歌人・石垣美喜子、畠山満喜子、俳人・片桐久恵、川上弥生について、自筆資料や著書などを紹介し、詩人の小坂淑子、三谷風子、みなもとみわこ、歌人の仲井真理子、平岡和代、山口桂子、俳人の川井城子、野中多佳子について、パネルで作品を紹介した。また、富山県の歌壇、俳壇、詩壇の歴史を紹介するパネルも展示した。

今回の企画展では、魅力的な作品を残し、富山の女性作家のさきがけとして大きな足跡を残しているにもかかわらず、普段なかなか目にする機会が少ない作家たちに光をあてた。各人について、初期から後期まで作家活動の軌跡をたどることができるように構成し、自筆資料、作品が掲載された当時の雑誌、著書のほか、愛用品、書簡、写真なども豊富に展示した。また、絶版になっていたり、単行本に収録されていない作品も多いため、作品を読むための抜粋パネルをいくつか掲示した。時代背景と作家本人の人生についても知ることができるよう、詳細な年譜を作成した。時代の困難と闘い、悩みながら執筆をした彼女たちの等身大の姿にふれるまたとない機会になったのではないかと思う。

本展の開催にあたり、作家の皆様・ご遺族をはじめ、多大なご協力をいただいた関係各位に深く感謝申しあげる。

□主な展示物

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
小寺菊子				
雑誌（復刻）	女鑑　第15年第12号（復刻版）		（明治38年（1905）12月）	サンフォルテ図書室
雑誌	少女界　第7巻第6号		明治41年（1908）6月	高志の国文学館
雑誌	少女界　第8巻第2号		明治42年（1909）2月	高志の国文学館
書籍	少女の一念（金港堂書籍）	尾島菊子	明治41年（1908）	高志の国文学館
書籍	少女小説　御殿さくら（金港堂書籍）	尾島菊子	明治42年（1909）	高志の国文学館
書籍	文子乃涙（金港堂書籍）	尾島菊子	明治43年（1910）	高志の国文学館
雑誌	少女の友　第4巻第14号		明治44年（1911）12月	高志の国文学館
書籍	頬紅（春陽堂）	尾島菊子	大正2年（1913）	高志の国文学館
雑誌	少女画報　第3年第4号		大正3年（1914）4月	高志の国文学館
雑誌	少女画報　5年1号		大正5年（1916）1月	高志の国文学館
雑誌	良友　第1年第7号		大正5年（1916）6月	高志の国文学館
雑誌	良友　第1年第10号		大正5年（1916）9月	高志の国文学館
雑誌	活動之友　第5年第1号		明治42年（1909）1月	高志の国文学館
書簡	渡辺霞亭宛封書	徳田秋聲	明治43年（1910）10月14日消印	高志の国文学館
書籍	父の罪（辰文館）	小寺菊子	明治44年（1911）	高志の国文学館
雑誌（復刻）	青鞜　第1巻第2号（復刻版）		（明治44年（1911）10月）	高志の国文学館
雑誌（復刻）	青鞜　第1巻第4号（復刻版）		（明治44年（1911）12月）	高志の国文学館
書籍	青鞜小説集　第一（東雲堂）	青鞜社編	大正2年（1913）	高志の国文学館
原稿	原稿「小春の日」（複製）	小寺菊子		高志の国文学館（原品：富山市教育委員会）
雑誌	日本之婦人　第1巻第2号		大正2年（1913）2月	高志の国文学館
雑誌	新小説　第十八年第二巻		大正2年（1913）2月	高志の国文学館
書籍	紅あざみ（日比谷書院）	小寺菊子	大正3年（1914）	高志の国文学館
雑誌	新日本　第5巻第3号		大正4年（1915）3月	高志の国文学館
雑誌	文章世界　第10巻4号		大正4年（1915）4月	高志の国文学館
雑誌	文章世界　第14巻1号		大正8年（1919）1月	高志の国文学館
書籍	百日紅の蔭（実業之世界社）	小寺菊子	大正4年（1915）	高志の国文学館
雑誌	ニコニコ　第71号		大正5年（1916）12月	高志の国文学館
書籍	十八の娘（須原啓興社）	尾島菊子	大正6年（1917）	高志の国文学館
雑誌	太陽　第25巻第12号		大正8年（1919）10月	高志の国文学館
雑誌	世界公論　第9年第11号		大正7年（1918）11月	高志の国文学館
雑誌	創造日本　第1巻第2号		昭和2年（1927）5月	高志の国文学館
雑誌	婦女界　第37巻第2号		昭和3年（1928）2月	高志の国文学館
書籍	情熱の春（教文社）	小寺菊子	昭和3年（1928）	高志の国文学館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
原稿	草稿「楽屋口」	小寺菊子	昭和9年（1934）7月	高志の国文学館
雑誌	あらくれ　第2巻第9号	秋聲會編	昭和9年（1934）9月	高志の国文学館
雑誌	歌劇　第188号		昭和10年（1935）11月	高志の国文学館
原稿	草稿「野心を希ふ」	小寺菊子	昭和10年（1935）4月頃	高志の国文学館
書籍	深夜の歌（教文社）	小寺菊子	昭和11年（1936）	高志の国文学館
雑誌	あらくれ　第6巻第1号		昭和13年（1938）1月	高志の国文学館
書籍	花犬小鳥（人文書店）	小寺菊子	昭和17年（1942）	高志の国文学館
書籍	辻小説集（八紘社杉山書店）	日本文学報国会編	昭和18年（1943）	高志の国文学館
雑誌	さんるうむ　第2巻第9号		昭和22年（1947）10月	高志の国文学館
雑誌	藝林間歩　第2巻第8号	加藤教榮	昭和22年（1947）11月	高志の国文学館
書籍	四十大家現代女性観（日高有倫堂）	石川喜美子編	明治44年（1911）	高志の国文学館
書籍	名流趣味百話（日本書院）		大正8年（1919）	高志の国文学館
書籍	大正婦人立志傳（大日本雄辯會）	澤田撫松（忠次郎）	大正15年（1926）	高志の国文学館
書籍	新装　きもの随筆（双雅房）	双雅房編	昭和13年（1938）	高志の国文学館
雑誌	新日本　第5巻第6号		大正4年（1915）6月	高志の国文学館
書籍	婦人界　第2巻第10号		明治43年（1910）8月	—
パネル（雑誌）	文藝春秋　五月一幕物号		大正14年（1925）5月	高志の国文学館
短冊	若楓ゆらぐを見つゝ急のべに…	小寺菊子		高志の国文学館
雑誌	家庭　第4巻第3号		昭和9年（1934）3月	高志の国文学館
書簡	翁久允宛封書（小寺菊子自筆履歴書）	小寺菊子	昭和11年（1936）11月頃か	翁久允旧蔵（個人蔵）
書簡	高志人社編輯局宛葉書	小寺菊子	昭和11年（1936）10月20日消印	翁久允旧蔵（個人蔵）
パネル（雑誌）	高志人　第2巻第1号	翁久允主宰	昭和12年（1937）1月	高志の国文学館
雑誌	高志人　第2巻第2号	翁久允主宰	昭和12年（1937）2月	高志の国文学館
書簡	中央公論社婦人公論編輯部宛葉書	小寺菊子	昭和13年（1938）2月28日消印	高志の国文学館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
パネル（雑誌）	「箱根の秋」（文學世界　第1巻第2号　1922年11月号）	小寺菊子	大正11年（1922）11月	高志の国文学館
パネル（雑誌）	アサヒグラフ　大正14年2月11日「春をさきがけの朱葉会展覧会」		大正14年（1925）2月	
書籍	小寺菊子作品集　全3巻（桂書房）	金子幸代編	平成22年（2010）	高志の国文学館
尾竹紅吉（富本一枝）				
木版画（色刷）	忠臣蔵　七段目（富山売薬版画）	尾竹国一画	明治25年（1892）4月	富山県立図書館
写真（パネル）	尾竹三兄弟（国一、国観、竹坡）		明治時代	折井美耶子氏提供
写真（パネル）	尾竹家の人々		明治時代	折井美耶子氏提供
写真（パネル）	尾竹一枝（十代のころ）		明治40年代	折井美耶子氏提供
写真（パネル）	「陶器」（屏風絵）	尾竹一枝	明治45年（1912）制作	折井美耶子氏提供
絵画	弾琴（もと屏風絵・部分）	尾竹一枝	大正元年（1912）制作	富本京子氏提供
写真（パネル）	枇杷の実（屏風絵）	尾竹一枝	大正2年（1913）	折井美耶子氏提供
写真（パネル）	尾竹四姉妹（一枝、貞子、福美、三井）		明治44年（1911）頃	折井美耶子氏提供
雑誌（復刻）	青鞜　第2巻第4号（復刻版）		（明治45年（1912）4月）	高志の国文学館
雑誌	青鞜　八月号	青鞜社編	大正2年（1913）8月	高志の国文学館
書籍（復刻）	円窓より（復刻版）	平塚らいてう	（大正2年（1913））	サンフォルテ図書室
書籍（復刻）	火の娘（復刻版）	荒木郁	（大正3年（1914）	サンフォルテ図書室
雑誌（復刻）	青鞜　第2巻第3号（復刻版）		（明治45年（1912）3月）	高志の国文学館
雑誌（復刻）	青鞜　第2巻第5号～第11号（復刻版）		（明治45年（1912）5月～11月）	高志の国文学館
新聞（パネル）	「所謂新しき女（二）（三）」（国民新聞、明治45年7月13日、14日）		（明治45年（1912）7月）	国立国会図書館提供
写真（パネル）	「南郷の朝」（『青踏』第2巻第9号掲載）		明治45年（1912）夏撮影	—
雑誌	世界　第122号～第123号		昭和31年（1956）2月、3月	高志の国文学館
雑誌	番紅花　第1巻第1号		大正3年（1914）3月	世田谷文学館
雑誌（復刻）	番紅花　第1巻第1号～第6号（復刻版）		（大正3年（1914）3月～8月）	世田谷文学館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
写真（パネル）	尾竹一枝と富本憲吉結婚式		大正3年（1914）10月	折井美耶子氏提供
衣類	花嫁衣裳（黒引き振袖）	尾竹越堂図案、尾竹一枝着用		富本京子氏
写真（パネル）	新婚時代の一枝と憲吉		大正3年（1914）	
雑誌	女性日本人　1920年10月号		大正9年（1920）10月	高志の国文学館
写真（パネル）	家族写真			富本京子氏
雑誌（復刻）	女性　第2巻第5号（復刻版）		（大正11年（1922）11月）	サンフォルテ図書室
雑誌	婦人公論　第8年第3号		大正12年（1923）3月	高志の国文学館
雑誌	婦人公論　第8年第7号		大正12年（1923）7月	高志の国文学館
雑誌（復刻）	女人藝術　第1巻第3号（復刻版）		（昭和3年（1928）9月）	サンフォルテ図書室
雑誌（復刻）	女人藝術　第2巻第6号（復刻版）		（昭和4年（1929）6月）	サンフォルテ図書室
雑誌（復刻）	女人藝術　第2巻第8号（復刻版）		（昭和4年（1929）8月）	サンフォルテ図書室
雑誌（復刻）	女人藝術　第4巻第7号（復刻版）		（昭和6年（1917）7月）	サンフォルテ図書室
雑誌	雑記帳　第2巻第4号		昭和12年（1937）4月	高志の国文学館
雑誌	随筆雑誌　新風土　第2巻第2号		昭和14年（1939）2月	高志の国文学館
雑誌	風花　第3号	富本一枝編	昭和22年（1947）8月	高志の国文学館
雑誌	風花　4号・5号合併号	富本一枝編	昭和22年（1947）12月	高志の国文学館
写真（パネル）	富本一枝		昭和25年（1950）頃	富本京子氏
書簡	陽あて書簡	富本一枝	昭和時代	折井美耶子氏
書籍	少年少女劇集　1に12をかけるのと、12に1をかけるのと（山の木書店）	久保田万太郎	昭和23年（1948）	高志の国文学館
書籍	柿の木のある家（山の木書店）	壺井栄	昭和24年（1949）	富本京子氏
書籍	ジァンヌ・ダルク（山の木書店）	横塚光雄	昭和25年（1950）	高志の国文学館
書籍	二十四の瞳（光文社）	壺井栄	昭和28年（1953）	富本京子氏
書籍	トム・ソーヤー物語（家庭讀物刊行會）	家庭讀物刊行會編	大正10年（1921）	富本京子氏
雑誌	暮しの手帖　第33号		昭和31年（1956）2月	高志の国文学館
雑誌	暮しの手帖　第34号		昭和31年（1956）5月	高志の国文学館

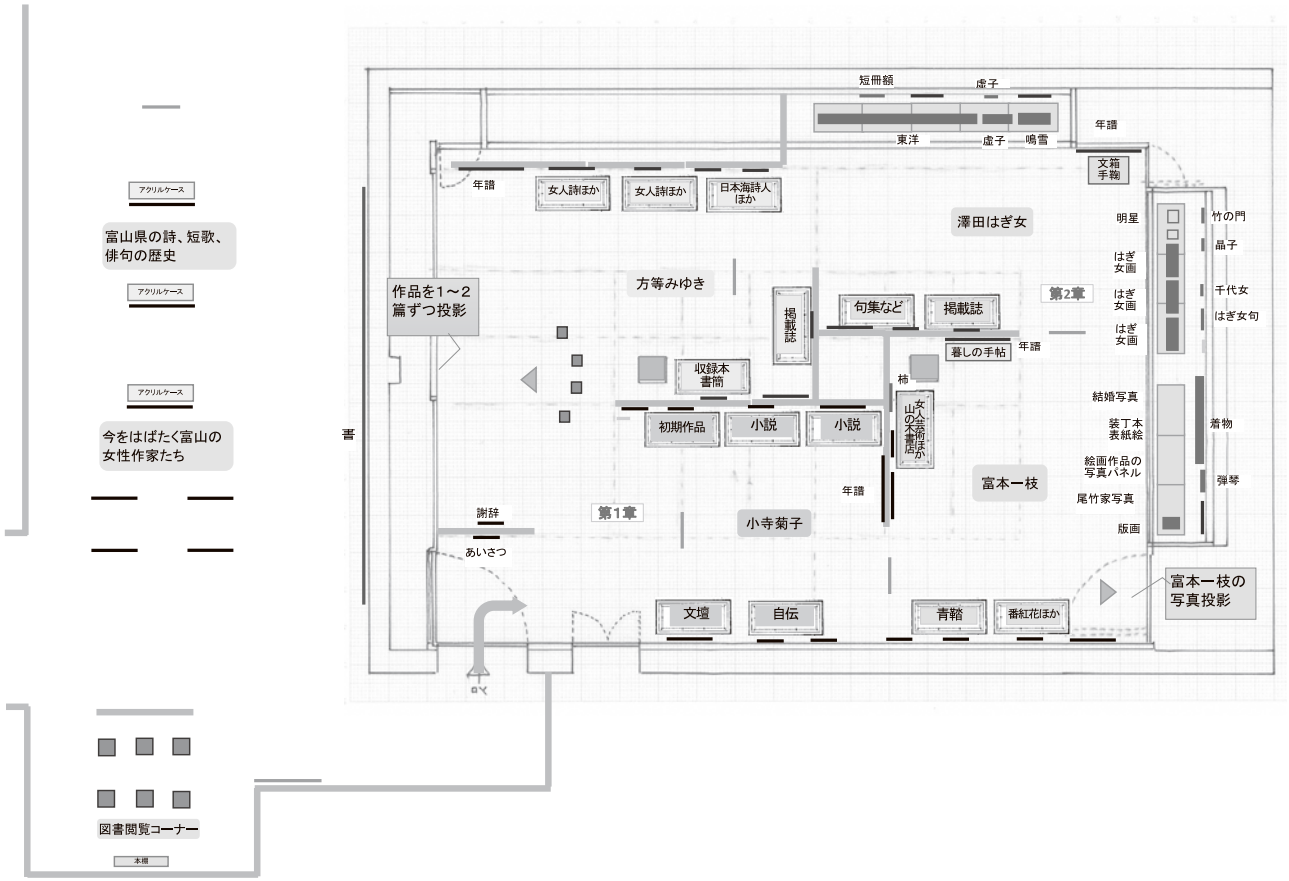
種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
雑誌	暮しの手帖　第37号		昭和31年（1956）12月	高志の国文学館
雑誌	暮しの手帖　第38号		昭和32年（1957）2月	高志の国文学館
雑誌	暮しの手帖　第40号		昭和32年（1957）7月	高志の国文学館
雑誌	暮しの手帖　第41号		昭和32年（1957）9月	高志の国文学館
書籍	お母さんが読んで聞かせるお話 A、B（暮しの手帖社）	富本一枝、藤城清治	昭和47年（1972）	高志の国文学館
書画	柿の一枝と筆墨（『詩経』の一節）	富本一枝		富本京子氏
写真（投影）	富本一枝関連写真			富本京子氏、折井美耶子氏
澤田はぎ女				
スケッチ	（画帳）	長澤初枝	明治時代	澤田家
スケッチ	ゑかた帳　明治廿四年三月	長澤初枝	明治34年（1901）3月	澤田家
スケッチ	画帳　明治三十五年四月十四日より	長澤初枝	明治35年（1902）4月14日～	澤田家
愛用品	紙製文箱	長澤初枝	明治時代	澤田家
愛用品	手毬	澤田はぎ女	昭和時代	澤田家
書画	そなさんと知っての雪の礫かな	澤田はぎ女書、観峰画		澤田家
書	降さしてまた幾所か初しくれ	加賀千代女		澤田家
短冊	そなさんと知っての雪の礫かな	澤田はぎ女		高志の国文学館
書	やかたなどさもあらばあれ海こえて羅津に対す本丸の松	与謝野晶子（寛）		澤田家
雑誌（復刻）	明星　明治34年第10号、11号（復刻版）	与謝野寛編	（明治34年（1901）1月、2月）	高志の国文学館
書画	紅梅	筏井竹の門	大正10年（1921）頃	澤田家
書籍	守水老遺稿（越友会）	山口林造編	昭和16年（1941）	高志の国文学館
短冊	砺波野の家ほっほっと花になり	山口花笠		高志の国文学館
書簡	澤田初枝宛書簡	高濱清（虚子）	明治41年（1908）9月5日作成	澤田家
書	三人になりし二人や芋の秋	高濱虚子	明治41年（1908）頃	澤田家
書簡	澤田初枝宛書簡	内藤鳴雪	明治41年（1908）8月17日作成	澤田家
書簡	澤田初枝宛書簡	松根東洋城	年不明12月1日作成	澤田家

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
短冊	五百里をはるはる上り京の市に…	与謝野鉄幹		澤田家
短冊	発句にもまとまらぬよな海鼠かな	夏目漱石		澤田家
短冊	茶屋裏や膳棚見えてそこも藤	澤田岳楼		澤田家
パネル（新聞）	国民俳壇（国民新聞明治40年10月24日付）			国立国会図書館提供
パネル（新聞）	国民俳壇（国民新聞明治41年5月26日付）		明治41年（1908）5月26日	国立国会図書館提供
パネル（新聞）	国民俳壇（国民新聞明治41年6月23日付）		明治41年（1908）6月23日	国立国会図書館提供
雑誌	新聲　第16編第3号		明治40年（1907）3月	高志の国文学館
雑誌	文庫　第34巻第5号		明治40年（1907）7月	高志の国文学館
雑誌	葦附　一ノ九		明治40年（1907）10月	高志の国文学館
雑誌	葦附　二ノ一		明治41年（1908）2月	高志の国文学館
雑誌	ホトトギス　第12巻第5号	高濱清編	明治42年（1909）2月	高志の国文学館
書籍	随筆　私の見た美人たち（読売新聞社）	吉屋信子	昭和44年（1969）	個人
書籍	俳句に魅せられた六人のをんな（近藤書店）	池上不二子	昭和32年（1957）	富山県立図書館
書籍	はぎ女句集（東美友善堂）	沢田初枝	昭和38年（1963）	高志の国文学館
書籍	俳の風景（角川書店）	沢木欣一	昭和61年（1986）	高志の国文学館
書籍	俳はぎ女（桂書房）	福田俳句同好会編	平成17年（2005）	高志の国文学館
方等みゆき				
雑誌	日本海詩人　第4巻11月号	大村正次編	昭和4年（1929）11月	高志の国文学館
パネル（新聞）	高岡新報　懸賞文芸詩欄		昭和5年（1930）1月	富山県立図書館提供
書簡	高松翠宛封書	井上靖	昭和21年（1946）7月22日消印	世田谷文学館
雑誌	女人（9月号）～6月号	方等深雪ほか	昭和5～6年（1930～31）	富山県立図書館
雑誌（復刻）	女人藝術　第3巻第8号（復刻版）		（昭和5年（1930）8月）	サンフォルテ図書室
雑誌（昭和6年3月号）	日本海詩人　女人号	大原菊子編	昭和6年（1931）3月	世田谷文学館
雑誌	詩之家　9月号（第7年第9号）昭和6年版	佐藤惣之助編	昭和6年（1931）9月	高志の国文学館
書籍	西蔵美人（現代評論社）	佐藤惣之助	昭和6年（1931）	世田谷文学館
雑誌	女人詩　創刊号	方等深雪編	昭和6年（1931）9月	世田谷文学館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
雑誌	女人詩　第2号	方等深雪編	昭和6年（1931）10月	世田谷文学館
雑誌	女人詩　第3号	方等深雪編	昭和6年（1931）11月	世田谷文学館
雑誌	女人詩　第4号	方等深雪編	昭和7年（1932）1月	世田谷文学館
雑誌	女人詩　第5号	方等深雪編	昭和7年（1932）3月	世田谷文学館
書籍	詩之家年刊詩集　一九三二年　春季版（詩之家出版部）	佐藤惣之助編	昭和7年（1932）	高志の国文学館
雑誌	女人詩　第6号	方等深雪編	昭和7年（1932）5月	世田谷文学館
雑誌	女人詩　第7号	方等深雪編	昭和7年（1932）7月	世田谷文学館
雑誌	女人詩　第8号	方等深雪編	昭和7年（1932）9月	世田谷文学館
雑誌	女人詩　第9号	方等深雪編	昭和8年（1933）3月	世田谷文学館
雑誌	女人詩　第10号	方等深雪編	昭和8年（1933）5月	世田谷文学館
雑誌	女人詩　第11号	方等深雪編	昭和8年（1933）8月	世田谷文学館
雑誌	女人詩　第12号	方等みゆき編	昭和8年（1933）11月	世田谷文学館
写真（パネル）	小寺菊子女史を迎へて		昭和8年（1933）11月	世田谷文学館提供
書籍	しんでれら（詩之家）	方等みゆき	昭和9年（1934）	高志の国文学館
雑誌	女人詩　第13号	方等みゆき編	昭和9年（1934）3月	世田谷文学館
雑誌	女人詩　第14号	方等みゆき編	昭和9年（1934）8月	世田谷文学館
書籍	きりのはな（女人詩社）	倉田ゆかり	昭和9年（1934）	世田谷文学館
雑誌	女人詩　第15号	方等みゆき編	昭和10年（1935）1月	世田谷文学館
雑誌	女人詩　第16号	方等みゆき編	昭和10年（1935）4月	世田谷文学館
雑誌	女人詩　第17号	方等みゆき編	昭和10年（1935）8月	世田谷文学館
原画	「女人詩第17号」扉画	青柳喜兵衛画	昭和10年（1935）	世田谷文学館
原画	「女人詩第17号」表紙画	青柳喜兵衛画	昭和10年（1935）	世田谷文学館
書籍	牛乳の歌（とらんしっと詩社）	青柳喜兵衛	昭和14年（1939）	世田谷文学館
書籍	ひとすぢの糸（女人詩社）	塚原弥生	昭和10年（1935）	世田谷文学館
写真	「東京新宿オリンピックにおける会合」		昭和10年（1935）10月	世田谷文学館
雑誌	女人詩　第18号	方等深雪編	昭和11年（1936）3月	世田谷文学館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
雑誌	麺麭　第5巻第7号		昭和11年（1936）7月	高志の国文学館
書籍	いやらしい神（蒲田書房）	北川冬彦	昭和11年（1936）	世田谷文学館
雑誌	女人詩　第19号	方等深雪編	昭和11年（1936）10月	世田谷文学館
パンフレット	「詩と音楽と舞踊の夕べ」パンフレット	主催：詩と民謡社、日本詩壇社	昭和12年（1937）1月	高志の国文学館
雑誌	海　第5輯		昭和12年（1937）1月	高志の国文学館
雑誌	女人詩　第20号	方等深雪編	昭和12年（1937）9月	世田谷文学館
書籍	遺稿詩集　月の苑（女人詩社）	すがあきえ	昭和13年（1938）	世田谷文学館
雑誌	山畑　第1巻第3号		昭和12年（1937）10月	世田谷文学館
書簡	高松翠子宛葉書	野上弥生子	昭和12年（1937）5月18日発信	世田谷文学館
書簡	高松翠子宛葉書	宮本百合子	昭和12年（1937）5月30日発信	世田谷文学館
書籍	詩集　天の鍵（アルス）	深尾贇之照著、深尾須磨子編	大正10年（1921）	世田谷文学館
書簡	高松翠宛封書	深尾須磨子	昭和12年（1937）5月27日発信	世田谷文学館
書籍	詩集　諸国の天女（河出書房）	永瀬清子	昭和15年（1940）	世田谷文学館
書籍	中部日本詩集（詩と民謡社）	中山輝編	昭和15年（1940）	高志の国文学館
書籍	新女性詩集（鶴書房）	深尾須磨子編	昭和17年（1942）	近藤周吾氏
書籍	詩集　海の詩（日本女性詩人協會季刊詩集第二輯）（書物展望社版）	日本女性詩人協會編	昭和18年（1943）	世田谷文学館
書籍	佐藤惣之助覚え帖（桜井書店）	潮田武雄編	昭和18年（1943）	世田谷文学館
書簡	高松翠宛封書	深尾須磨子	（年不明）6月28日発信	世田谷文学館
雑誌（パネル）	新詩人　第2巻第1号		昭和22年（1947）1月	国立国会図書館提供

□企画展示室平面図



富山県歌壇・俳壇・詩壇の歴史（近代以降）略年表

凡例

一、この略年表は、「個性きらめく富山の女性作家たち展」第一期導入展示の関連で作成した。太字は女性歌人または女性歌壇・俳壇・詩壇の動向とした。併せて、短歌・俳句・詩を掲載した文芸同人誌も掲げた。略年表は、現段階で調査し得た事項を記載したものであり、お気づきの点がございましたらご連絡、ご教授を賜りたい。
一、略年表は、年号、西暦をそれぞれ記した。
一、参考文献は、典拠とした「著者・編者」「書名」「出版社等」「刊行年」の順に記載した。

富山県歌壇の歴史（近代以降）

明治34（1901）年	回覧文芸雑誌『聚雲』創刊　編集代表人：高田浩雲
明治～昭和期	片口安之助、広井浩風、古谷雲歩、藻谷銀河、木津蛍雪らが活躍
大正３（1914）年	文芸同人誌『月見草』創刊　編集発行人：野村重正　竹久夢二、室生犀星らが寄稿
	詩歌雑誌『鎔岩』創刊　編集発行人：広沢秀遷、伊勢好三
大正５（1916）年	詩歌雑誌『赤い船』発刊　編集発行人：興林秀夫
大正８（1919）年	同人誌『火焔』創刊
大正10（1921）年	詩歌雑誌『潮光』発刊　編集発行人：興林秀夫
大正11（1922）年	総合文芸同人誌『ふるさと』発刊　編集発行人：杉山産七、中井精一
大正12（1923）年	文芸同人誌『東天紅』発刊　編集発行人：正満又七
大正13（1924）年	郷土文化誌『水郷』創刊　編集発行人：千石喜久　寄稿者：相馬御風、白鳥省吾、梅原真隆、筏井竹の門、山口花笠など
大正14（1925）年	総合文芸同人誌『裸像』創刊　編集発行人：中野重治
昭和２（1927）年	『まるめら』創刊　主宰：大熊信行
昭和６（1931）年	『紫羅蘭花』創刊　主宰：中田春園
	『水澄』創刊　編集刊行：ひでおかみはら
昭和７（1932）年	『はしばみ』創刊　編集人：広川浹（広川親義）　発行人：金森青一
昭和９（1934）年	木俣修旧制富山高等学校来任
昭和10（1935）年頃	新聞歌壇盛況
昭和11（1936）年	郷土文化誌『高志人』創刊　編集発行人：翁久允　相馬御風、高島高ら多数が執筆
昭和15（1940）年	『蒼生』（のち『創生』と改題）創刊　主宰：筏井嘉一
昭和17（1942）年	「白椿短歌会」創立　主宰：竹上盛衛
昭和21（1946）年	『短歌時代』創刊　主宰：広川親義　大坪晶一、深山榮、吉沢弘などが活躍
昭和23（1948）年	『ゆきぐに』創刊　編集発行人：館川数夫
	『海潮』創刊　主宰：岡部文夫
	『北陸沃野』創刊　編集発行人：木村玄外
昭和24（1949）年	『茜』創刊　主宰：**大町閑子**　**松谷絹枝**、**木谷松枝**、**坂田美紀子**などが活動
昭和27（1952）年	『紫苑短歌』創刊　主宰：清田秀博、編集：久泉迪雄
昭和28（1953）年	『形成』創刊　主宰：木俣修
昭和29（1954）年	富山県歌人連盟結成　初代会長：小又幸井
昭和30（1955）年	『コスモス富山』（のち『零』と改題）創刊　**日影康子**、井口知行、**松野道子**などが活動
昭和33（1958）年	「炎の会」創立　主宰：中塩清臣
昭和35（1960）年	「福野短歌会」創立　会長：西部重盛
昭和36（1961）年	富山県歌人連盟『富山県歌人』創刊

昭和37（1962）年	「アカンサス短歌会」創立　主宰：**野村玉枝**
	「原型富山支部」創立
昭和38（1963）年	『富山古今』創刊　編集発行人：逢坂敏男
昭和39（1964）年	『原型富山』創刊　代表：宮下繁次、**竹田夏子**ら　米田憲三、**石垣美喜子**などが活動
昭和40（1965）年	『もず』創刊
	「形成富山支部」結成　代表：小山政雄
昭和42（1967）年	『枯山水』創刊　代表：小島貞夫
	『形成富山』創刊　小山政雄没後代表：武田吉三郎　吉田桂介、**松島保子**などが活動
昭和44（1969）年	『紫羅蘭花』富山で復刊　主宰：中田春園
昭和45（1970）年	『庭燎』創刊　主宰：本田伊信
昭和48（1973）年	『あさ』創刊　主宰：**林たづ子**
昭和50（1975）年	「まひるの富山支部」創立　支部長：**坂田美紀子**
昭和51（1976）年	『たてやま』創刊　主宰：立村一見、沢田一雄
昭和55（1980）年	「黒部短歌会」創立　主宰：柴垣光郎　**小坂千代栄**、**小沢百合子**などが活動
昭和56（1981）年	「かりん富山支部」創立　代表：**立野朱美**
昭和57（1982）年	『港』創刊　主宰：**高松光代**
昭和58（1983）年	『越路短歌』創刊　主宰：島原義三郎
	『渓流』創刊　主宰：柴垣光郎
昭和60（1985）年	「八尾短歌会」創立　主宰：**宮本すず枝**
平成12（2000）年	「筏井短歌会」創立　代表者：佐野善雄
	「大沢野短歌会」創立　主宰：村山千栄子
平成17（2005）年	「富山 ViTA もえぎ短歌会」創立　代表者：明石幹雄
平成18（2006）年	「綺羅短歌会」創立　主宰：久泉迪雄
平成19（2007）年	総合歌誌「弦」創刊　創設者：**辺見じゅん**　代表者：植松哲太郎
平成20（2008）年	「萩の会」創立　主宰：**畠山満喜子**
平成25（2013）年	「入善耀短歌会」創立　主宰：**石垣美喜子**
	『黒日傘』創刊　編集：高島裕
平成30（2018）年	「海市歌会」創立代表者：黒瀬珂瀾

現在、県内の短歌会誌名として『海潮』『短歌時代』『綺羅』『原型富山』『弦』『紫苑短歌』『零』『あさ』『大沢野』『渓流』『萩』『もえぎ』『菅の葉』『雪椿』などがある

主な参考文献：

・富山県編『富山県史　通史編Ⅴ』近代上　富山県　1981. 3
・富山県編『富山県史　通史編Ⅵ』近代下　富山県　1984. 3
・富山県編『富山県史　通史編Ⅶ』現代　富山県　1983. 3
・富山県文学事典編集委員会編『富山県文学事典』桂書房　1992. 9
・富山大百科事典編集事務局編『富山大百科事典　上』北日本新聞社　1994. 8
・富山大百科事典編集事務局編『富山大百科事典　下』北日本新聞社　1994. 8
・富山県芸術文化協会編『とやま文学 第32号』富山県芸術文化協会　2014. 3
・富山県歌人連盟編『富山県歌壇総覧』富山県歌人 第25号　富山県歌人連盟　1986. 3
・富山県歌人連盟編『富山県歌壇総覧Ⅱ』富山県歌人 第56号　富山県歌人連盟　2015.12
・仲井真理子編『富山県歌人 第61号』富山県歌人連盟　2020.12
・一般財団法人　富山県芸術文化協会 HP
・富山県立図書館 HP など

富山県俳壇の歴史（近代以降）

明治15（1882）年	浪化上人150回忌　追善句集『麻頭巾』刊行
明治18（1885）年	芭蕉翁200回忌句会　福野町、城端町、魚津町などで開催
明治25（1892）年	正岡子規が新聞「日本」に新派の俳句を提唱
明治27（1894）年	寺野守水老、「青藍社」を興す
明治30（1897）年	河東碧梧桐来富、高岡市和田西光寺投宿
	青藍社解散
	寺野守水老、山口花笠、向田（のち筏井）竹の門らにより「越友会」結成
明治37（1904）年	氷見にて服部霞峯を中心に「有磯吟社」を結成
明治39（1906）年	『葦附』発行。俳人に巴陵句鬼、浦島弧島、岡野牧羊、澤田岳楼、**澤田はぎ女**
大正４（1915）年	『層雲』から分かれた『海紅』が創刊。城端の野村満花城や米田稲助らが影響を受ける
大正９（1920）年	富山市において篠原句瑠璃、松岡白芽や水橋の俳人たちが中心となり『濤』を発刊
大正12（1922）年	文芸同人誌『東天紅』発行　編集発行人：正満又七
大正13（1923）年	郷土文化誌『水郷』創刊　編集発行人：千石喜久　寄稿者：相馬御風、白鳥省吾、梅原真隆、筏井竹の門、山口花笠など
	石田露泣、玉島謙郎により金沢市で『辛夷』創刊
大正14（1925）年	『辛夷』発行所を八尾に移したのち富山市に移し前田普羅が選者、後に主宰となる。
	ホトトギス系の橋爪巨籟、毛利白牛、吉沢無外などが集う
	筏井竹の門死去。昭和に入り「越友会」のリーダーは山口花笠となり岩崎夜鶴、正田涼園子、**塚原真月女**などが集まる
昭和４（1929）年	伊東月草が『草上』を創刊。金尾梅の門は同人として参画
昭和６（1931）年	高浜虚子らが来遊、黒部峡谷に吟行
昭和11（1936）年	郷土文化誌『高志人』創刊　主宰：翁久允
昭和18（1943）年	『草上』廃刊
昭和19（1944）年	物資統制の強化により『辛夷』休刊
昭和20（1945）年	棟方志功、福光に疎開。前田普羅と親交をかさね「辛夷」福光支部長となり表紙絵やカットを提供
昭和21（1946）年	『辛夷』復刊
昭和22（1947）年	『古志』創刊　主宰：金尾梅の門
昭和24（1949）年	『喜見城』創刊。昭和25年８月号より棟方志功による版木による題字、版画が登場
昭和27（1952）年	『古志』→『季節』と改題
	『萌芽』主宰：真野紅露『穭田』主宰：古川杏水創刊
昭和29（1959）年	福井、金沢の同志と提携し北陸俳話会結成。富山県より18人参加。昭和40年代に入り解散
昭和30（1955）年	『萌芽』休刊
	水鳥俳句社富山県連合会創設　代表：**山崎冨美子**
昭和33（1958）年	『河』創刊　主宰：角川源義
昭和36（1961）年	『医王』創刊　主宰：室生砺川
昭和43（1968）年	『河』（角川源義主宰）高岡支部結成
	『寒潮』創刊　代表制はなく編集人は氷室樹
昭和47（1972）年	『荒海』創刊　主宰：船平晩紅
昭和50（1975）年	富山県俳句連盟結成　初代会長吉澤卯一
昭和53（1978）年	『俳句往来』創刊　主宰：中井三好
昭和54（1979）年	『片栗』創刊　主宰：瀬戸十字
昭和55（1980）年	『高志』創刊　主宰：谷内茂

昭和56（1981）年	『いわせの』創刊　主宰：**蒲田美音**
	『医王』終刊
平成２（1990）年	『清流』俳句会設立　主宰：高村寿山
平成３（1991）年	俳人協会富山県支部設立　初代支部長に福永鳴風
平成５（1993）年	県現代俳句協会設立　初代会長に黒田晩穂
平成９（1997）年	『萌芽』季刊誌として復刊
平成15（2003）年	『峡谷』創刊　主宰：八尾とおる
平成18（2006）年	『黒部川』創刊　主宰：松田郷人
平成22（2010）年	『森』創刊　主宰：森野稔
	『辛夷』１,000号達成　主宰：中坪達哉
平成23（2011）年	『五七五』創刊　代表：高橋修宏
令和２（2020）年	『表情』創刊　主宰：**川井城子**

現在、県内の俳誌として『辛夷』『喜見城』『寒潮』『高志』『森』『水鳥』『片栗』『峡谷』『表情』『五七五』『清流通信』などがある。結社の県内支部として『ホトトギス』『河』『栞』『岳』『獺祭』『海原』など多くある。

（注）創刊された俳誌が永く続くことは難しく『辛夷』１,000号の達成は富山県俳壇の層の厚さと底力を示し全国的にも快挙として注目された。

主な参考文献：

・富山県編『富山県史　通史編Ⅴ』近代上　富山県　1981.３
・富山県編『富山県史　通史編Ⅵ』近代下　富山県　1984.３
・富山県編『富山県史　通史編Ⅶ』現代　　富山県　1983.３
・富山県文学事典編集委員会編『富山県文学事典』桂書房　1992.９
・富山大百科事典編集事務局編『富山大百科事典　上』北日本新聞社　1994.８
・富山大百科事典編集事務局編『富山大百科事典　下』北日本新聞社　1994.８
・富山県芸術文化協会編集『とやま文学 第32号』富山県芸術文化協会　2014.３
・一般財団法人　富山県芸術文化協会 HP
・富山県立図書館 HP など

富山県詩壇の歴史（近代以降）

明治15（1882）年	『新体詩抄』による新詩運動起こる
明治33（1900）年	文芸同人誌『太刀文学』創刊　編集発行人：梅本徳太郎
明治34（1901）年	文芸同人誌『北声』創刊　編集発行人：福田栄太郎
	回覧文芸雑誌『聚雲』創刊　編集代表人：高田浩雲
大正３（1914）年	文芸同人誌『月見草』創刊　編集発行人：野村重正　竹久夢二、室生犀星らが寄稿
	詩歌雑誌『鎔岩』創刊　編集発行人：広沢秀遷、伊勢好三
大正５（1916）年	詩歌雑誌『赤い船』発刊　編集発行人：興林秀夫
大正10（1921）年	詩歌雑誌『潮光』発刊　編集発行人：興林秀夫
大正11（1922）年	総合文芸同人誌『ふるさと』発刊　編集発行人：杉山産七　大間知篤三が詩を発表
大正12（1923）年	『聖詩風』発刊　編集発行人：高林清一
	文芸同人誌『東天紅』発刊　編集発行人：正満又七
大正13（1924）年	郷土文化誌『水郷』創刊　編集発行人：千石喜久　寄稿者：相馬御風、白鳥省吾、梅原真隆、筏井竹の門、山口花笠など
大正14（1925）年	総合文芸同人誌『裸像』創刊　編集発行人：中野重治
大正15（1926）年	金沢市で『日本海詩人』創刊　富山版は昭和２年３月から中山輝、山岸曙光子らで発行
	文芸同人誌『あおきみそら』発刊　編集発行人：福岡正雄
昭和初期	この頃シュールレアリスムの詩活動が起こる
昭和２（1927）年	『裏日本』を創刊　編集人：張田友次郎、発行人：高林清一
昭和３（1928）年	『日本海詩人』を石動町の大村正次宅に発行所を移す　以後大村正次が主宰
昭和４（1929）年	『新詩脈』創刊　編集発行人：川口清　川口を中心に菊池久之、田中富雄（のちの源氏鶏太）らで発足
	『白萍』創刊　編集発行人：舟川栄次郎
	『北冠』創刊　編集発行人：宮崎健三　井上泰（のちの井上靖）、久湊信一らで創刊
昭和５（1930）年	『詩と民謡』創刊　編集発行人：中山輝
昭和６（1931）年	**『女人詩』創刊**　編集発行人：**方等みゆき**
	くらたゆかり、東ゆき、大原菊子、朝森弓子、埴野華子、小野吟子、すがあきゑ、高柳奈美、塚原真月、牧千枝子、坂本茂子、中村敏江、小暮妙子らの同人のほか**深尾須磨子、生田花世、竹内てるよ、左川ちか、永瀬清子**らの寄稿を得る
昭和10年代	民謡詩と童謡の運動が盛んになる
昭和11（1936）年	郷土文化誌『高志人』創刊　編集発行人：翁久允　相馬御風、高島高ら多数が執筆
昭和21（1946）年	『抒情詩』創刊　編集発行人：萩野卓司　10号から稗田菫平が参加
	『青笛』創刊　編集発行人：藤田直友
昭和22（1947）年	文芸同人誌『文学組織』創刊　編集発行人：高島高　翁久允、**竹内てるよ**らが参加
	文芸雑誌『野薔薇』創刊　編集発行人：稗田菫平　松原敏夫、**吉井澄子**らで発足
	『昆虫針』創刊　編集発行人：市谷博
昭和23（1948）年	『骨の火』創刊　編集発行人：高島順吾　昭和26年に「E·MIR」と改題
昭和26（1951）年	『SEIN』創刊　編集発行人：上村萍／『謝肉祭』創刊　編集発行人：埴野吉郎
昭和29（1954）年	『詩と民謡』復刊　編集発行人：中山輝
昭和32（1957）年	『ばるく』創刊　編集発行人：青塚与市
昭和33（1958）年	『奪回』創刊　編集発行人：野海青児
昭和37（1962）年	富山現代詩人懇話会発足　会長：萩野卓司／文芸同人誌『象』創刊　編集発行人：市谷博
昭和38（1963）年	年刊詩華集『富山詩人』創刊　編集発行人：萩野卓司ほか
昭和39（1964）年	富山現代詩人懇話会が富山現代詩人会に改称　会長：萩野卓司

昭和40（1965）年	『牧人』創刊　編集発行人：稗田菫平
昭和42（1967）年	『北国帯』創刊　編集発行人：松沢徹
昭和43（1968）年	『ある』創刊　編集発行人：森田和夫　創刊は主宰森田のほか、高島順吾、森幸一、**くらたゆかり**、**沢田静子**、**朝森弓子**らで発足
昭和46（1971）年	『越境』創刊　編集発行人：小森典
昭和48（1973）年	『野火』創刊　編集発行人：**吉川道子**／『ルパン詩通信』　編集発行人：田中勲
昭和49（1974）年	『火の子』創刊　編集発行人：**吉川道子**／『あーかんわ』　編集発行人：**高田みつ子**
昭和51（1976）年	『勿忘草』創刊　編集発行人：**尾山景子**　**吉川順子**、**高木紀美子**らなど６人で発足
昭和52（1977）年	『洲』創刊　編集発行人：山本哲也　石田敦、**高田みつ子**、山本の三人誌として発足／
	『街路樹』創刊　編集発行人：吉浦豊久、高橋貞一
昭和55（1980）年	『えきまえ』創刊　編集発行人：田中勲
昭和56（1981）年	『遊星』創刊　編集人：鈴木豊　発行人：本田信次　本田、田中勲、**尾山景子**らで発足
昭和57（1982）年	『詩吾无』創刊　編集発行人：**高田みつ子**　**広瀬利已子**、**北村正子**、山本茂、**高田**の４人で発足
昭和59（1984）年	『飛翔』創刊　編集発行人：室谷紀彰
昭和60（1985）年	『航跡』創刊　編集発行人：石田敦
平成元（1989）年	『禱』創刊　編集発行人：**白井知子**（50号から**池田瑛子**が編集発行人）
平成３（1991）年	『大マゼラン』創刊　編集発行人：本田信次　本田、**尾山景子**、田中勲らが参加
平成８（1996）年	「国民文化祭とやま」に秋谷豊、鎗田清太郎、石原武、**高良留美子**らが来富
平成９（1997）年	『ゾエア』創刊　編集発行人：寺崎浩文
平成10（1998）年	『ネット21』創刊　発行者：ネット21の会（田中勲、吉浦豊久など）
平成15（2003）年	『カラブラン』創刊　発行人：**柴田恭子**　**高沢留衣**、**佐倉れみ**らが参加
平成16（2004）年	『氷見』創刊　編集発行人：近岡礼
平成17（2005）年	富山現代詩人会が解散し富山県詩人協会が設立　初代会長：田中勲
平成18（2006）年	『富山県詩人協会年間詩集 ANTHOLOGY TOYAMA』創刊　編集人：本田信次　発行人：田中勲
平成21（2009）年	『瀧口修造研究会会報　橄欖』創刊　編集：土渕信彦、**尾山景子**　**柴田恭子**、**高島夏代**らが参加
平成22（2010）年	『漁舟』創刊　代表：近岡礼／『天蚕糸』創刊　発行者：田中勲
令和２（2020）年	『NS』創刊　編集発行人：高橋修宏　本田信次との二人誌
令和３（2021）年	大伴家持文学賞記念「詩の集い」に**井坂洋子**が来富
	『Magellan Future』創刊　編集発行人：本田信次　高橋修宏らが参加

現在発行されている県内の詩誌などとして『漁舟』『氷見』『瀧口修造研究会会報　橄欖』『NS』『Magellan Future』『富山県詩人協会年間詩集 ANTHOLOGY TOYAMA』などがある。

主な参考文献：

・富山県編『富山県史　通史編Ⅴ』近代上　富山県　1981.３
・富山県編『富山県史　通史編Ⅵ』近代下　富山県　1984.３
・富山県編『富山県史　通史編Ⅶ』現代　　富山県　1983.３
・富山県文学事典編集委員会編『富山県文学事典』桂書房　1992.９
・富山大百科事典編集事務局編『富山大百科事典　上』北日本新聞社　1994.８
・富山大百科事典編集事務局編『富山大百科事典　下』北日本新聞社　1994.８
・稗田菫平編『富山詩壇年表略史』富山近代文学研究会　2004.８
・富山県芸術文化協会編集『とやま文学 第32号』富山県芸術文化協会　2014.３
・一般財団法人　富山県芸術文化協会 HP
・富山県立図書館 HP
・富山県詩人協会ブログなど

Ⅱ

〔論文〕

方等みゆき　―富山に女性詩の黎明を告げた詩人

綿引　香織

方等（ほうとう）みゆき　―富山に女性詩の黎明を告げた詩人

綿引　香織

はじめに

方等みゆき（1896～1958）は、昭和初期の高岡を拠点に活躍した詩人であり、全国的にも珍しい女性詩人による詩誌『女人詩』を創刊・主宰したことで知られている。方等の作品は当時、さまざまな詩誌・雑誌等に掲載されており、その活躍の舞台は富山だけにとどまらず、詩人たちとの交流も幅広いものであった。そのため、富山の文学史や女性史を語る場においては、これまでにも触れられる機会はあったもの[1]、詳細な研究はほとんどなく、年譜や作品目録などの基礎的な情報の整備すら立ち遅れている状況であった[2]。それはおそらく、活躍の時期が比較的短く、戦後の作品発表についてはほとんど伝わっていないこと、まとまった著作としては詩集1冊を数えるのみであること、戦後に生活の拠点が富山から東京へと移ったことなどによると思われる。

近代以降、富山の女性作家たちが歩んできた歴史を振り返るとき、方等みゆきの残した足跡は大きな意義を持っている。そのため当館では、企画展「個性きらめく富山の女性作家たち」の第1期で方等をとりあげて紹介することとしたが、右に記したような状況から、まずは集めた資料をもとに年譜と作品目録を作成するところから準備を始める必要があった。その結果、昭和初期（特に昭和4年から12年にかけて）に方等が発表した具体的な作品や掲載誌の情報が蓄積され、『女人詩』創刊に至るまでの過程や、これまで謎に包まれていた『女人詩』休刊以降の文学活動の一端も見えてきた。旧蔵資料の調査により明らかになったこともある[3]。

企画展開始の段階では解明できなかった点も多く、研究としてはまだ不十分なものではあるが、今回発掘した内容を活字化してほしいとの声を頂いたこともあり、この企画展で制作したパネルの内容に改訂・増補を加え、ひとまずここに紹介することとした。

方等の詩は今も色あせない魅力をもっており、注目する文学関係者も少なくない。これを契機に、方等みゆきの再評価や研究の機運が高まることを願っている。

方等みゆき　プロフィール

まずはプロフィールを確認しておこう。

方等みゆき（本名・高松翠）は、明治29年（1896）3月1日、射水郡長などを務めた高松覚太郎の長女として射水郡新湊町（現射水市）に生まれた。

富山県立高岡高等女学校を卒業し、京都府立第一高等女学校（現在の京都府立鴨沂高等学校の前身）に入学。同校の国漢専攻科卒業[4]のち、結婚して神戸に9年間居住。その間、外国航路の航海士だった夫がドイツで病死。二男一女を抱えて高岡に帰郷し、父母と同居。昭和3年（1928）頃に高岡市立高等女学校の国語教師となる。

写真：『越中人譚』第60号（チューリップテレビ、2003年）より

教員生活の傍ら詩作に励み、昭和4年（1929）頃から、大村正次が編集発行する『日本海詩人』に方等深雪の名で詩を投稿。翌年には『高岡新報』の懸賞文芸詩部門で一等に入選し、長谷川時雨らによる『女人芸術』に詩が掲載されるなど、高い評価を得る。

昭和6年（1931）6月から佐藤惣之助主宰の『詩之家』に入会し[5]、同誌に作品を発表。同年9月に「女人詩社」を結成し、全国でも数少ない女性詩人による詩誌『女人詩』を創刊主宰。女性詩人の作品発表と研鑽・交流の場として、くらたゆかりや朝森弓子らの後進を育てると同時に、永瀬清子、深尾須磨子、竹内てるよ、生田花世、小寺菊子らとも活発に交流した。

このほか、『まるめら』『麺麭』『朱人』『越中新聞』などさまざまな詩誌・新聞等にも詩や短歌、随筆等を発表。昭和9年（1934）には詩之家より

第一詩集『しんでれら』を刊行した。装丁は古賀春江。24頁からなる瀟洒な1冊である。

昭和12年（1937）の『女人詩』休刊後は、『中部日本詩集』（昭和15年）や『新女性詩集』（昭和17年）などの合同詩集に作品が収録されたほか、『佐藤惣之助覚え帖』（昭和18年）に師への追悼詩1篇を寄稿。戦後の活動については不明な点が多い。

昭和33年（1958）9月8日、転居した東京にて62歳で死去。

方等は、夫と死別した悲しみや孤独、働く女性・母親としての率直な思いなどを力強い言葉で詩に託した。絵を趣味とし、洋画会・丹緑社の同人としても活動している。

詩人としての出発

方等みゆきの初期の詩は、『日本海詩人』と『高岡新報』詩壇に多くを見ることができる。同誌の編集担当であり、詩壇選者を務めた大村正次（1896～1974）の存在は、方等が詩人として出発するにあたり重要な役割を果たした。

『日本海詩人』は、日本海詩人連盟の機関誌として大正15年（1926）に金沢で創刊され、翌年には富山・新潟版が富山で発刊。昭和3年（1928）には発行所を石動の大村正次方に移し、以降大村が編集を担当した。この頃高岡で教員となっていた方等みゆきも『日本海詩人』の同人となり、昭和4年（1929）11月号には「やもめ」「桃色にもえよ」「まじはり」の3篇が掲載された。[6] 夫を亡くした女性の孤独感や、心の奥に灯る情熱をうたう内容で、「新しさと聡明さがある。こういう新人の登場は、男性にとって脅威である」との評価を得ている。昭和7年（1932）に同誌が廃刊するまで、方等の詩はたびたび掲載され、昭和6年3月には「女人号」特集も組まれた（後述）。

昭和5年（1930）元日の『高岡新報』には、方等が懸賞文芸詩部門に応募した詩「八号のカンバス」[7] ほか2篇が1等（天）として掲載された（2等は井上泰（靖）の「向日葵」）。『高岡新報』の「詩壇」は、若手詩人の育成をかねて大村が前年8月に創設したものであり、方等の詩はその年から何度か掲載されていた。選者である大村は「方等さんの詩には女流としては珍らしくフレッシュな聡明さと熱情がある。泉のやうに自然に流出した抒情味がある。安価なセスチメントなどすこしもない、表現も確かである」と高い評価を与えている。

八号のカンバス

正直な　つゝましい　写実派の八号風景は
私の過去の作品
もう　こんなにほこりだらけ

塵を払つて真白に塗消した
心のカンバス
ほら　こんなに厚みが出来てよ。

今度こそ私の好きな　黒と　黄と　紅を主調に――
思ひ切つて鋭い　印象派のタッチで――
私のパッシヨンを注射しよう。

また、長谷川時雨らによる女性文芸雑誌『女人芸術』昭和5年8月号に、「やもめは」の詩が掲載されたことも、方等の名が全国に知られる一つのきっかけとなっただろう。

こうしたさまざまな出会いや交流が、詩人方等をはぐくみ、やがて『女人詩』の創刊へとつながっていった。

『女人詩』の創刊

昭和6年（1931）9月に、方等みゆきを中心とする「女人詩社」により創刊された詩誌『女人詩』。その創刊に向けた歩みは、約1年前から始まっていた。

方等ら女性詩人たちが塚原英子（眞月、弥生）の宗泉寺に集まって「女人詩の会」第1回例会を開催したのは、昭和5年（1930）8月のことだった。毎月一回、日曜日に開催されたこの勉強会は、時に詩人の大村正次や菊池亮らを講師に迎えて行われ、徐々に参加者を増やしていった。その研鑽の成果は、ガリ版刷りの詩誌『女人』として9号分が富山県立図書館に残されている。

昭和6年（1931）3月には、『日本海詩人』において、執筆者全員が女性という「女人号」が作られた（編輯人は大原菊子）。方等は表紙絵（版画）を担当し、3篇の詩（「ゆめをはむ」「女性礼讃賦」「紫煙昇天之図」）とメンバー紹介文「私達のグルツペ」を寄せている。方等がグループのメンバーとして名前を挙げているのは、自身のほか、東ゆき子、大原菊子、塚原英子、廣瀬正枝、狭山美保子、朝森弓子、倉田由加里、篠島信子、杉坂文子、中川蒼生子、車ゆかりの11名。巻末の「雑記」で方等は、「悲しんだり、引込思案をしたりなどしなくともいゝんです勇敢に思切つてうたひませう声のつゝくかぎり。女性の世界を明快に、宏大にひろげませう皆さん」と力強く呼びかけている。

その半年後の同年9月、満を持して『女人詩』は創刊された。創刊号の巻頭言「つゆぐさ」における方等の言葉を抜粋してみよう。太陽に向かって咲く向日葵の花に対して、自分たちを野の小径につつましく咲く一輪の露草になぞらえての言葉である。

偏狭な貝殻生活に甘じてゐる女性がその貝殻を脱し、厚化粧の中に表情を抹殺しようと努力してゐる女性が素裸な素顔を露出して、自己を明確に凝視し、純真な思索の世界にかつちりした立体的な瞳を輝かせることは、扁平に傾き勝な彼女らにとつて、かなり大きな意味を持ち得ることゝ云ひたい。たとへ、ハンデキヤツプをつけられ、地平線下であらうとも、男性をぬきにした女性のみの天地で、のび〳〵と四肢を伸し、胸襟を開放し、朗かな飛躍を試み、鋭利な剣を研ぎ澄し、そして温かい手を握りあひ、何と素晴しい朗かな念願に燃えてゐる彼女らである事よと呼びかけやう。（中略）

陽も、月も、風も、雨も、ふりかゝれ。刺戟（しげき）ある生活の詩化は露草を培つてくれるであらう。

同人には、東ゆき、大原菊子、塚原英子（眞月）、廣瀬正枝、狭山美保子、朝森弓子、倉田ゆかり、篠島信子、杉坂文子、中川蒼生子、小野吟子、すがあきゑなどがおり、永瀬清子、深尾須磨子、英美子（はなぶさよしこ）、左川ちか、竹内てるよ、生田花世、小寺菊子、壷田花子など全国で活躍中の詩人・作家の寄稿も得て、号を重ねるごとに全国に同人を増やしていった。方等も毎号に作品を発表し、時に表紙絵も担当。外部講師を招いて各号の批評会を行い、与謝野晶子や小寺菊子らが来県した折には歓迎懇談会を催すなど、活発な活動の様子がうかがえる。第13号は方等の詩集『しんでれら』（詩之家、昭和9年）刊行記念号、第15号はくらたゆかりの詩集『きりのはな』（女人詩社、昭和9年）刊行記念号である。

女人詩社からはこのほか、中村敏江詩集『みち』（昭和10年）、塚原眞月『ひとすじの糸』（昭和10年）、『すがあきゑ遺稿詩集　月の苑』（昭和13年）などを刊行。しかし、『女人詩』は第20号（昭和12年9月号）を出して以降自然休刊となり、その後再開されることはなかった。明確な理由はわかっていないが、資金不足の問題や、戦争に向う時代の影響などが指摘されている。[8]

作品紹介

今日では、詩集『しんでれら』や方等の作品が収録されている選集類は絶版となっており、詩誌『女人詩』を所蔵している機関も少ないことから、気軽に作品を読むことすら難しくなっている。方等の詩にふれていただくため、ここでは、展覧会場にパネルとして掲示した詩をいくつかご紹介する。

女性礼讃賦

頬紅が仄かにさゝれた水平線
陽の女王の華やかな化粧のひとゝき
いましまつかな一点のかたゐくぼ
みるまに
　まつかな櫛
　まつかな扇
　まつかな日傘
女王さまの君臨
さつと一線をきつて
水ぎは立つたあざやかな飛躍
くる〳〵と熱情の舞
燦然と煌く装束
黄金をちりばめた波のもすその眩惑
　おゝ素晴しい女性の誕生
　かゞやかしい意志
　あでやかな　情操
昔太陽は女性なりき
今　女性は太陽なり
女よもろ手を高くあげませう
日の出です
日の出です

『日本海詩人』第6年3月　昭和6年（1931）掲載

わたくしのまどろすに

あれた　エトルタ、マチスの画のやうな海のひとよ、
ふつぜんと　石の枕をけたてゝおくれ、めぐすりを点滴して　星のやうにみひらいておくれ、
臘石のくちびるに血をいれて
バロメーターに灯をともして　セキスタンドを方向転換しておくれ、
キヤプテンの金文字を胸にかざし　折れたマストをたかくたてゝ　貿易風にかへっておくれ、
日本のはとばは　こんなにもちかい、
七年はながすぎる。

わたしは　やぶれたきものつくろって、ほゝべにつけてまってゐる。
もゝいろのむすめになって、
マダム　バタフライになってまってゐる。

詩集『しんでれら』昭和9年（1934）所収

斫る

さんさんと　ひかりがふりかゝったとおもった瞬間、
くろいつばさが　扉をしめた、
白百合のてぶくろをはめた　かあいそうな　まどもあぜる、
霧がこんなにもさめざめと

だが　百年を封じこめた部屋のなかゝら
噴水のやうにうかびあがった虹の橋、
噴霧器のやうに匂ふ五色のえすぷり、
　百年まて　百年まて
因襲のあざけりにふりむくな、
つめたい巨手に鍵をかけろ、

蒼空を自由にとぶ　船だ、帆だ、オートジヤイロだ。

をんなよ、斫れ！

詩集『しんでれら』昭和9年（1934）所収

青心譜

むらさきのひぐれの木立　くらしのベルトをゆるめ、仕事着をぬぎ、
ゆりかごのやうな気流のなか、すきとほる虚手をみつめる。
静脈に　すんなりと　深淵のひとしづくがさいた。
水晶のはしらを　氷のほこらに建て
くろがみも　みだれぬしゞま、
あれ　ながれぼしの箭が　あをい尾をひいて、つゆにつゆくさに
水のやうな風がわたると　ほたるのあをいこゝろはつと
とほい　あるぷすへ。

詩集『しんでれら』昭和9年（1934）所収

方等みゆきが参加した詩誌・歌誌・文芸誌

次に、方等みゆきが参加した主な詩誌・歌誌・文芸誌を見ておきたい。[10] ここに示した19件のうち、およそ半数は富山県内で発行され（網掛けしたもの）、残りは全国誌や他県で発行されたものである。これらの詩誌・歌誌・文芸誌への参加状況からは、方等の詩人・作家たちとの交遊関係がうかがわれて興味深い。この中で、方等にとって特に重要な作品発表の場だったと思われるのが、主宰誌である『女人誌』以外では『日本海詩人』『詩之家』『まるめら』などである。なお、現時点でわかっている範囲での作品発表状況については、文末に掲載した略年譜を参照いただきたい。

誌名	掲載時期	発行所＊掲載時所在	備考	創刊／終刊
日本海詩人	昭和4年～7年	日本海詩人連盟（富山・石動町）	大村正次編集発行	大正15年12月／昭和7年
女人芸術	昭和5年8月	女人芸術社（東京）	長谷川時雨ほか編	昭和3年7月／昭和7年6月
女人	昭和5年	（富山）	女人詩の前身	昭和5年／不明
女人詩	昭和6年～12年	女人詩社（富山・高岡市）	方等みゆき主宰	昭和6年9月／昭和12年9月
詩之家	昭和6年6月～	詩之家編輯部	佐藤惣之助主宰	大正14年7月／昭和7年1月
まるめら	昭和7年1月～9年	まるめら編輯所	大熊信行主宰	昭和2年1月／昭和17年2月
詩朝	昭和7年3月～	詩朝社（富山・氷見町）	菊池亮主宰	昭和7年1月／不明
朱人	昭和7年3月～	朱人社（福井・鯖江町）	横山貞治編集発行	昭和7年1月／不明
女性詩歌	昭和8年10月～	現代書房（東京）	吉野信夫編集発行	昭和8年10月／不明
詩と方法	昭和8年8月	不明	—	不明
愛誦	昭和9年3月	交蘭社（東京）	西條八十主宰。「新進詩人紹介号」	大正15年5月／昭和9年4月
婦人文芸	昭和9年～12年5月	新知社（東京）	神近市子主宰	昭和9年7月／昭和12年8月
麺麭	昭和11年～12年	麺麭社	山口孫太郎、北川冬彦など編集発行	昭和7年11月／昭和13年1月
海	昭和12年1月	聖詩風社（富山・氷見町）	高林清一編集発行	昭和11年1月／昭和12年1月
山畑	昭和12年10月	山畑詩社（富山・東砺波郡東般若村）	納藤秀雄編集発行	昭和12年4月／不明
紀	昭和13年7月	紀発行所	佐藤惣之助主宰	昭和13年2月／不明
九州文学	昭和13年	九州文学社	青柳喜兵衛追悼号	昭和13年／昭和58年12月
新詩人	昭和21年12月～22年1月	新詩人社（長野市）	田中聖二編集	昭和21年1月／平成6年
文燈	昭和22年1月	文燈社（富山・高岡市）	松原敏夫編集発行	昭和21年1月／不明

※網掛けは富山で発行されたもの。太字は主宰誌。

方等みゆき　その後

『女人詩』は昭和12年（1937）発行の第20号を最後に休刊となったが、その後の方等みゆきの創作活動については、現在のところ不明な点が多い。中山輝編『中部日本詩集』（昭和15年）、深尾須磨子編『新女性詩集』（昭和17年）、日本女性詩人協会編『詩集　海の詩』（昭和18年）、日本文学報国会編『詩集　大東亜』（昭和19年）[11]などの合同詩集に作品が収録されたほか、『佐藤惣之助覚え帖』（昭和18年）に師・佐藤惣之助への追悼詩1篇を寄せたことが確認されているが、昭和5年から12年にかけての旺盛な創作活動に比べると大きな開きがある。この点については、『女人詩』の休刊による創作意欲の衰えや、不況や戦争に向かう時代状況の影響などが想像されるが、真相はわからない。

戦後の動向についてはさらに情報が限られるが、昭和21年（１９４６）７月頃には、かつて『日本海詩人』で切磋琢磨した詩友・井上靖の訪問を受けている。[12] 宛先住所や文面から、この頃はまだ高岡に暮らしていたと見られる。

また、数は少ないが、戦後に作品を発表していることも今回明らかになった。長野の田中聖二らにより発行された詩誌『新詩人』には2篇の詩が掲載されており、昭和21年12月号には旧作の「かたへに坐して」、昭和22年1月号には新作の「波のまそらに」が掲載されている。巻末の同人住所録を見ると、岡村須磨子（深尾須磨子）や壺田花子らの名前はあるが、方等の名前はない。同誌に作品を発表したのは、親しく交流のあった深尾須磨子が同人だったことの縁であろうか。方等と同じく「詩之家」の同人だった永瀬清子も作品を掲載している。

もうひとつ、高岡市の松原敏夫らにより発行された詩誌『文燈』第４輯（昭和22年1月発行）にも新作の詩「波」が掲載されている。先の「波のまそらに」とほぼ同じ内容ではあるが、詩句の一部と末尾に記された制作年月日が異なる（「波」では「二一、九、二九作」、「波のまそらに」では「昭和二十一・十・五作」）。全体的に暗い色調の詩だが、「波頭を乗り越えようと血まなこに　ぬき手を切つてゐる」人々に対し、「もはや私には　野心もない」との言葉には、静かな諦観が漂う。

波のまそらに

ぢつと眼をつむると
波が私の身辺におしよせてくる
蒼茫の海の果から
白い牙　くろいひばらをみせて
うねり　うづまき　泡だち
私の身辺におしよせてくる

さかまく波の頂点に立つたと思つた瞬間
忽ち　どどどどどつと　突き落される
陥没の谷のまそらに

私の棲家はこゝ
起伏はげしき天地の輪廻（りんね）美しいかな
こゝは　私の一生の安らひの谷
絶望ではない
こゝに　ぢつとしてゐたい

あゝ人々は　波頭を乗り越えようと
血まなこに　ぬき手を切つてゐるが
しよせんは波のあやしき傀儡（かいらい）

波よ　もはや私には　野心もない
いつまでも　落転の底に沈んでゐたい
何か　かげりのある渣滓（おり）のやうに

（昭和二十一・十・五作）

『文燈』では、同人ではなく「特別寄稿者」の扱いとなっており、同誌の寄稿者紹介欄に「かつて女人詩主宰現東京在住」とあることも貴重な情報である。ここからは、同誌が発行された昭和22年（１９４７）1月1日時点ではすでに東京に転居していたことがわかる。

東京に転居した後の方等は詩作を続けたのだろうか。深尾須磨子からの書簡[13]には、方等が上京したことへの喜びと、また力作の詩を作ってどんどん発表してほしいという期待、そのための支援を惜しまないことなどがつづられていた。

詩人・方等みゆきの活動のさらなる解明に向けては、今後の調査研究が待たれる。また、作品そのものの分析・研究を行うことで、詩人としての位置づけも見えてくるだろう。このほかにも興味をひかれる事柄がいくつかあるが、[14] すべて今後の課題としたい。

注

（1）大坪晶一『自叙伝　青春挽歌』（短歌時代社、1965年）、森英一『物語・石川の文学』（能登印刷出版部、1985年）、高井進編『富山県女性史―鬼と女は人に見えぬぞよき、か』（桂書房、1988年）、稗田菫平『とやま文学の森』（桂書房、1990年）、『富山県文学事典』（桂書房、1992年）、浅生幸子「女の自己表現を詩作に求めた方等みゆき」（『越中人譚』第60号、チューリップテレビ、2003年）など。

（2）たとえば、方等の卒業校の名称にしても先行研究の間でずれがある。京都市立第一高等女学校（現在の京都市立堀川高等学校の前身）国文科卒業とするもの（『富山県文学事典』『越中人譚』）、富山県立高等女学校（現在の県立富山いずみ高等学校の前身）を卒業し、京都女子専門学校（現在の京都女子大学の前身）に学んだとするもの（『物語・石川の文学』『富山県女性史』）、京都女子高等専門学校（現在の京都女子大学の前身）卒とするもの（『20世紀日本人名事典』）などがある。本稿では、方等が参加していた「詩之家」の年刊詩集に掲載されているプロフィールの記載に従った（注4参照）。

（3）ご遺族から寄贈された旧蔵資料が世田谷文学館に所蔵されている。「幻の女性詩誌『女人誌』―詩人・方等みゆき関連資料―」（『世田谷文学館ニュース』第16号、2000年）を参照されたい。

（4）『詩之家年刊詩集　一九三二年版』（詩之家出版部、1932年）の記載による。

（5）注4に同じ。

（6）同誌に「牧野深雪」の名前で掲載されている詩が方等の詩だとすれば、昭和4年4月号までさかのぼることができる。あそうしげお氏は、自身で編集した『方等みゆき詩文集』（1995年、私家版）のなかに、『日本海詩人』（昭和4年）および『宴』（昭和12年、13年）に掲載されている「牧野深雪（みゆき）」の詩を、方等みゆきの作品として収録している。

（7）「八号のカンバス」は、『日本海詩人』第5巻1月号（1930年）にも掲載されている。引用は同誌のものによった。なお、本稿での詩および文章の引用にあたっては、旧字を新字に改めた。

（8）『女人詩』第20号のあとがきで、方等は次のように述べている。

このやうなたゞ中に同人詩誌など出す余裕があれば、よろしく恤兵金にと、誰か叱責するやうなこゑを感じながら、然しこれも私どもの生活であり、仕事であり、つよい意慾であるならば許してもらへるとおもふ。

女人詩もやつと二十号を迎へました。思ひ出したやうな刊行でまことに気息奄々と見えませうが、決して精神力は弱められてはゐません。今後もまたこのやうな出し方をするでせう。より高く、より真実に、より芸術的にと願ふこゝろのほかに何物もありませぬ。

また、方等の教え子で『女人詩』にも参加していた詩人くらたゆかりは、「女人詩の費用は全部といっていいくらい方等先生の月給から出されていたようです。大変な事だったと思います。」と記している（「方等先生の十七回忌」、『静思・文づき合併号』、高岡読書会・高岡婦人読書会編集発行、1974年11月）。

（9）原文では「いましまかつかな」となっているが、意味が通りにくいため誤植と判断し、本文を改めた。

（10）あそうしげお編『方等みゆき詩文集』（1995年、私家版）には、昭和5年の『ポトナム』、昭和6年の『短歌祭』、昭和8年の『はしばみ』にも作品が掲載されていることが指摘されている。現時点では未確認のためここには挙げなかったが、略年譜には掲載した。『はしばみ』は下新川郡泊町で昭和7年3月に創刊された短歌雑誌で、10年7月に終刊（編集人・広川親義、発行人・金森青一）。

（11）『新女性詩集』（鶴書房、1942年）および『詩集　大東亜』（河出書房、1944年）に方等の詩が掲載されていることについては、近藤周吾氏のご教示を得た。

（12）高松みどり宛書簡（世田谷文学館所蔵）。昭和21年（1946）7月22日の消印がある。住所の記憶が不確かとのことで、朝日新聞社高岡通

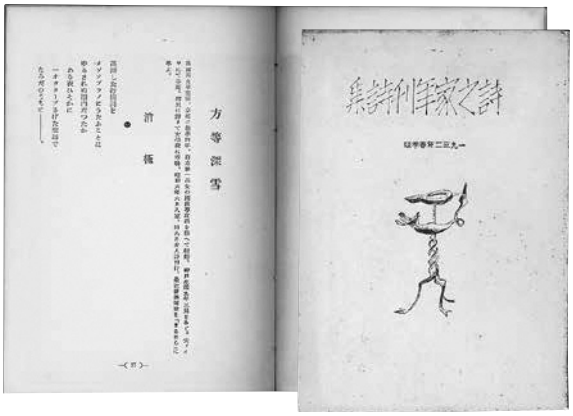
信部宛に出されている。方等との面会後、石川県や福井県に立ち寄ったことが記されている。

(13) 高松翠宛書簡（世田谷文学館所蔵）。6月28日に書かれたことはわかるが、消印が判読困難なため、昭和何年に出されたものなのかは不明。

(14) 昭和12年（1937）春に勤め先の高岡市立高等女学校で開催したという「現代女流画家・文芸家展」は、方等みずから上京して作家に揮毫を依頼するなどして、約百人の作品を集めたという大規模なもので（『女人詩』第20号所収、「女流展について」）、学校行事の枠をはるかに超える展覧会だったことをうかがわせる。

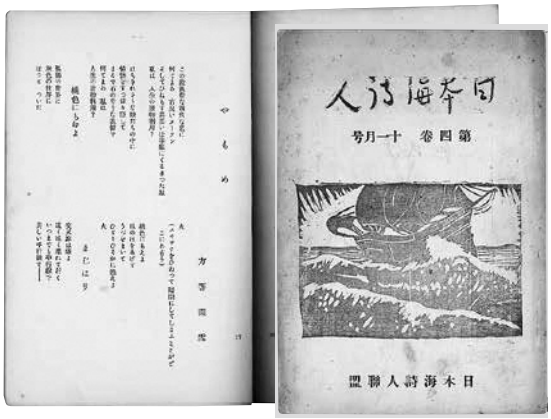
謝辞

方等みゆきに関する展示を構成するにあたっては、世田谷文学館、高岡市立図書館、富山県立図書館、サンフォルテ図書室、近藤周吾氏からご協力とご教示をいただきました。特に、旧蔵資料を有する世田谷文学館の小池智子氏、原辰吉氏には調査の段階からお世話になりました。ご関係の皆様に心よりお礼申し上げます。



『詩之家年刊詩集　一九三二年春季版』（高志の国文学館蔵）

詩之家出版部から昭和７年(1932)４月発行。佐藤惣之助編。方等深雪の詩「消極」「しやだんき」「ヴエガと」を収録。冒頭に著者のプロフィールも掲載されている。



『日本海詩人』第４巻11月号　（高志の国文学館蔵）

日本海詩人連盟から昭和４年(1929) 11月発行。大村正次編。方等深雪の詩「やもめ」「桃色にもえよ」「まじはり」を掲載。

方等みゆき（深雪）略年譜

西暦	和暦	年齢	主なできごと	主な発表作品・単著	関連事項・社会情勢・文学事象等
1896	明治29	0	3月1日、射水郡長などを務めた高松覚太郎の長女として**射水郡新湊町（現射水市）に誕生。本名・高松翠。**		4月、第1回近代オリンピック競技会（アテネ）。7月、『新声』『新小説』創刊。
1908	明治41	12	この頃、富山県立高岡高等女学校入学。		
1912	明治45	16	この頃、富山県立高岡高等女学校卒業。京都府立第一高等女学校入学。		
1916	大正5	20	この頃、京都府立第一高等女学校の国漢専攻科卒業。卒業後、結婚して神戸に居住。		
1925	大正14	29	神戸での生活を9年送る間に、外国航路の航海士だった夫がドイツで病死。二男一女を抱えて高岡に帰郷し、父母と同居する。		7月、『詩之家』創刊。
1926	大正15／昭和1	30			12月、『日本海詩人』石川・福井版が金沢で創刊。
1927	昭和2	31			3月、『日本海詩人』富山・新潟版が富山で発刊。『まるめら』創刊。
1928	昭和3	32	この頃、高岡市立高等女学校に奉職（国語）。		4月、『日本海詩人』富山・新潟版の発行所を石動の大村正次方に移す。『女人芸術』『詩と詩論』創刊。10月、大村正次『春を呼ぶ朝』
1929	昭和4	33	9月、『高岡新報』詩壇に詩を投稿。11月、**『日本海詩人』に「やもめ」ほかを発表。**	9月20日、「やもめ」（高岡新報）。10月21日、「ほんとうは」（高岡新報）。11月、詩「やもめ」「桃色にもえよ」「まじはり」（日本海詩人）	8月、『高岡新報』に詩壇欄が創設。11月、『北冠』創刊
1930	昭和5	34	**「高岡新報」懸賞文芸詩部門に応募、詩「八号のカンバス」ほかで1等に入選**（2等は井上靖）。1月、「日本海詩人」に「失はれしもの」ほかを発表。	1月1日、「八号のカンバス」「からすうり」「失はれしもの」（高岡新報）1月14日、「嵐」「つながれた山羊」（高岡新報）1月、「失はれしもの」「8号のカンバス」「黒い風景」（日本海詩人）2月11日、「把握」「霰」（高岡新報）3月22日、「二月九日のラヂオ」（高岡新報）。3月、短歌（ポトナム）	1月、『詩と民謡』創刊
1931	昭和6	35	3月、執筆者全員が女性という特集**『日本海詩人 女人号』が発行され**、方等も文章や詩、表紙絵（版画）を寄せる。6月、**佐藤惣之助主宰の「詩之家」に入会。**以降、機関誌「詩之家」に詩を発表。9月、**女人詩社を結成し、女性だけの同人詩誌「女人詩」を発行。**以降、毎号に文章や詩を掲載。11月、丹緑社油画展に作品8点を出品。	8月17日、女性詩人たちが集まって**「女人詩の会」第1回例会を宗泉寺にて開催。**以降、毎月第二日曜日に開催。ガリ版刷りの詩誌『女人』（9号分が現存）を発行。8月、**「女人芸術」に「やもめは」を発表。**	4月、『時間』創刊。『新興芸術派叢書』刊行開始。

西暦	和暦	年齢	主なできごと	主な発表作品・単著	関連事項・社会情勢・文学事象等
1896	明治29	0			
1908	明治41	12			
1912	明治45	16			
1916	大正5	20			
1925	大正14	29			
1926	大正15／昭和1	30			
1927	昭和2	31			9月、プロレタリア詩人会結成。9月、中山輝『石』
1928	昭和3	32		1月、「痛快な話」「虹の叙景」（日本海詩人）3月、「私達のグルッペ」、詩「夢をはむ」「女性礼讃賦」「紫煙昇天之図」「雑記」（日本海詩人　女人号）4月、「春空に描く」（短歌祭）6月と8月～11月の『詩之家』に作品発表（題名未詳。9月は「母子礼讃賦」「反射鏡」。8月、「ヨコに捧ぐ詩」（日本海詩人）9月、文「つゆぐさ」、詩「かくめい篇」「波」（女人詩1）10月、詩「期節のセンス」「涙腺」「灯を守護る」（女人詩2）11月、文「おちば」、詩「露台をくだる」「ひなたにおもふ」（女人詩3）	5月、「セルパン」創刊。9月、満州事変
1929	昭和4	33		5月、「ある鬱憤を」「はなれわざ」「火事は」（日本海詩人。5月、短歌（ポトナム）6月3日、「春樹」「女は」（高岡新報）。6月14日、「春のクロテスク」（高岡新報）8月、「女は」、「春」2篇、「送られゆく牛」（日本海詩人）。8月、「やもめは」（女人芸術）。8月9日、「早魃点景」（高岡新報）「荒れたる海」「雌豹」「失望」「消極」「ジレンマ」「虹の叙景」「痛快な話」「レモンテイ」「天象の意志」ほか（女人）11月、「荒れたる海」「星と失はれし指輪」（日本海詩人）	

西暦	和暦	年齢	主なできごと	主な発表作品・単著	関連事項・社会情勢・文学事象等
1932	昭和7	36	『詩之家』『女人詩』『日本海詩人』『まるめら』などに多くの作品を発表。 4月、『詩之家年刊詩集』に「消極」などの詩3篇が収録。	1月の『詩之家』に作品発表（題名未詳）。 1月、詩「元旦」「冬」「灯」、文「雑記」、表紙画「ヨーコ画」（女人詩4）。「氷河」（日本海詩人）。「いなごのいのち」（まるめら） 2月、「そこをたゝいて」「ゆびわに座す」（まるめら） 3月、「たそがれの部屋」（朱人）。詩「わきあがるもの」「ヴェガと」（女人詩5）。「生者死者」（まるめら）。「おとぎばなし」（詩朝） 4月、「消極」「しやだんき」「ヴェガと」（『詩之家年刊詩集』）。「てぶくろ」（まるめら） 5月、詩「点火」、文「雑記」（女人詩6）。「人まちがほに」「東京」（まるめら） 6月、「しんでれら」（朱人）。「石　宮田あき子氏に」「五月」（まるめら） 7月、詩「しもと」「青心譜」、文「後記」（女人詩7）。「またもはしる」「アルプスを恋ふ」（まるめら） 8月、『線』（『詩短冊』の改題）に作品発表（題名未詳）。「うはすべりのこゑ」（まるめら） 9月、詩「岩によぢて」「やまぐに―五箇山行」（女人詩8）。「をかのへのおくつき」（まるめら） 10月、「やまぐに」（まるめら） 11月、「秋のこゝろの」（まるめら） 12月、「をんな」（まるめら）	3月、『はしばみ』創刊。 5月、五・一五事件 7月、『麺麭』創刊。

西暦	和暦	年齢	主なできごと	主な発表作品・単著	関連事項・社会情勢・文学事象等
1933	昭和8	37	『まるめら』『女人詩』『越中新聞』などに作品を発表。 8月20日、東、くらたと称名滝を登山。 高岡丹緑社展に油画6点を出品。 11月5日、「女人詩の会」で与謝野晶子を迎えて懇談会を開催。 11月9日、「小寺菊子女史歓迎座談会」を女人詩社で開催。	2月、「やまひのとこ」（まるめら） 3月、詩「吹雪に叫ぶ」「ひとゝき」「ゆめの灯」、文「後記」（女人詩9） 4月、「卒業をまちがてなく」「かへし」「雪片」（まるめら） 5月、詩「かもめ」「すくつたむし―和歌―みゆき」（女人詩10）。「子の師に」「はるのみどり」「ゆめ」（まるめら）。5月15日、詩「たけのあき」（越中新聞）。 6月、「みなと」「めしつかひ」（まるめら）。「たけのあき」（詩と方法）。6月16日、「みなと」（越中新聞）。 7月、「たうゑどき」「おとづれ」（まるめら）。7月1日、「詩線に映るふたつの想ひ」（越中新聞） 8月、「二麗旦」評」（朱人）。詩「うみなり」「ひぐらし」、文「後記」（女人詩11）。「ひぐらし」（まるめら）。8月7日、「日本海山脈の著者に」（越中新聞） 10月、「寄附金行脚」「こどもたち」「称名滝」「指輪」（まるめら）。短歌「孤影」（女性詩歌）。10月25日、「ひときれの秋」（越中新聞）、10月30日、詩「秋蛍」（越中新聞）。 11月、詩「秋の幻想」、文「稱名瀧―女人トリオ―」（*共同執筆、文「後記」（女人詩12）。「父」「農婦」（まるめら）。随筆（女性詩歌）。 11月18日、「歌に讃す　與謝野寛・晶子氏に」（越中新聞）。 12月、「ある友に」（はしばみ）。12月28日、「氷雨の扉　この頃憂鬱なこと」（越中新聞）。	3月、国際連盟脱退 5月、『四季』（第1次）創刊。

西暦	和暦	年齢	主なできごと	主な発表作品・単著	関連事項・社会情勢・文学事象等
1934	昭和9	38	1月、詩集『しんでれら』を刊行。2月3日、「しんでれら」出版記念会を開催（於高岡寶亭）。 3月、「しんでれら記念号」として『女人詩』第13号を発行。 11月、女人詩社から倉田ゆかりの詩集『きりのはな』を刊行。11月25日、「きりのはな」出版記念会を開催（於高岡まるやホール）。	1月、詩集『しんでれら』（詩の家編輯部）、「百鬼夜行」「をんな」（まるめら）。1月29日、「ふぶきずし」（越中新聞）。 3月、詩「とれもろ」「雪野構図」、文「生活感傷」「小寺菊子女史歓迎会」（女人詩13）、詩「自嘲」（愛誦）。 4月19～20日、22～24日、「旅のてぶくろ　関西の縁にふれて」（越中新聞）。 5月、「さのさんをたづねて」（まるめら）。5月26～27日、「〝ごころつちよ〟の感想」（越中新聞）。 8月、詩「原つばの記」「雲散霧消」、文「旅それぞれ」「洪水来る」「接心雑筆」（女人詩14）。8月10、13、16、18～19日、「旅のほめうた（讃歌）」（越中新聞）。 11月、序文（『きりのはな』）。11月16日、「詩集〝きりのはな〟―その上梓にあたつて」（越中新聞）。 12月、「秋の微笑」（婦人文芸）	6月、萩原朔太郎『氷島』 6月、『婦人文芸』創刊 10月、『四季』（第2次）創刊 12月、中原中也『山羊の歌』
1935	昭和10	39	1月、「きりのはな記念号」として『女人詩』第15号を発行。 10月、女人詩社から中村敏江詩集『みち』、塚原眞月『ひとすぢの糸』を刊行。11月9日と24日に出版記念会を開催。 10月30日、東京新宿オリンピックにおける会合。方等みゆき、くらたゆかりが上京、深尾須磨子など出席。	1月、詩「自責」「興復」、文「後記」、表紙・カット（女人詩15） 2月3、10日、「女流詩人たち―主として郷土につながる―」（北國新聞）。 3月10～11日、「季節の随筆」（一）（二）（越中新聞）。 4月、詩「朝から夜へ」、文「ゆきのまなこ」、表紙文字・銅版画（女人詩16） 8月、詩「庭」「時計」、文「氷巌を読む」「白雲」「青頭巾と鬼」「あとがき」（女人詩17） 9月、「西と東―渡邊惟俊氏へのかへしぶみ―」（越中新聞） 10月、跋（『みち』）	3月、『日本浪漫派』創刊 6月、『多磨』創刊。7月、『VOU』創刊。

西暦	和暦	年齢	主なできごと	主な発表作品・単著	関連事項・社会情勢・文学事象等
1936	昭和11	40	『女人詩』『越中新聞』『麺麭』などに作品を発表。	1月、「日本の壁」（越中新聞） 3月、短歌「雪の花嫁　くらた・ゆかりにさゝぐ」、文「『ひとすぢの糸』への言葉」「杭」「北のまなこ」「うわがけ」「旅日記」「あとがき」（女人詩18） 4月、「浅春のうちそと」（越中新聞） 6月6日、「同人誌展望㈡　詩誌〝女人詩〟」（北國新聞） 7月、「寡婦のうた（其の三）」（麺麭） 10月、詩「虫の譜」、文「白雲抄」「くさのうへ」「滞京記」「あとがき」（女人詩19）。「抒情二題」（麺麭） 11月、「飛礫」（婦人文芸）。「田園短抄」（麺麭）	2月、二・二六事件 4月、北川冬彦『いやらしい神』 9月、『高志人』創刊
1937	昭和12	41	1月、詩と民謡社、日本詩壇社主催の「詩と音楽と舞踊の夕べ」（於富山電気ビル5階ホール）に参加し、自作詩を朗読。 4月下旬から5月上旬にかけて、勤め先の高岡市立高等女学校で開催予定の「現代女流画家・文芸家展」の準備のため上京し、神近市子、野上弥生子、富本一枝、小寺菊子ほか諸氏に揮毫を依頼。6月3日、5～6日に同展を開催。約100名の作品を集めたという。 9月、『女人詩』第20号発行。以後自然休刊。	1月、「孤高」（海）。「こゑ」（麺麭） 3月、「雪日記」（麺麭） 5月、「をとめに賺るうた」（婦人文芸）、「早春樹」（「一九三七年汎日本青年詩集NYGP」） 9月、詩「寡婦のうた（其の四）」「斑雲抄」、文「女流展について」「あとがき」（女人詩20） 10月、「斑雲抄」（山畑）	5月、立原道造『萱草に寄す』 7月、日中戦争始まる 10月、瀧口修造『妖精の距離』
1938	昭和13	42	11月、女人詩社より『すがあきえ遺稿詩集　月の苑』を刊行。	7月、「胎教」（紀） 11月、序文（『月の苑』） 「終焉ちかき日」（九州文学）	7月、高島高『北方の詩』
1940	昭和15	44	12月、「中部日本詩集」（詩と民謡社）に詩2篇が収録される。	9月15日～22日、「初秋の記」（北國新聞） 12月、「北のまなこ」「車窓」（「中部日本詩集」）	3月、『詩源』創刊。『昭和詩抄』刊行

西暦	和暦	年齢	主なできごと	主な発表作品・単著	関連事項・社会情勢・文学事象等
1941	昭和16	45	6月、『現代日本年刊詩集　昭和十六年版』に詩2篇が再録される。 11月、全日本女詩人協会編の詩集『母の詩』に詩6篇が収録される。	6月、「寡婦のうた」「くさのうへ」（『現代日本年刊詩集』） 11月、「母性誕生」「をさない洋子に」「寡婦のうた」「かたへに坐して」「明い街へと」「あしたのうた」（『母の詩』）	8月、高村光太郎『智恵子抄』 12月、太平洋戦争開戦
1942	昭和17	46	1月17日、富山文化協会主催「興亞芸能祭」（於富山電気ビル5階ホール）にて、方等作詞の小曲「雑草のうた」の公演あり（黒坂富治作曲）。 12月、深尾須磨子編『新女性詩集』に詩7篇が収録される。	1月、小曲「雑草のうた」（高志人） 12月、「寡婦のうた」2篇、「早春樹」「七夕祭り」「夏日」「飛礫」「まどべ」（『新女性詩集』）	5月、佐藤惣之助死去。
1943	昭和18	47	5月、日本女詩人協会編『詩集　海の詩』に詩1篇が収録される。 8月、『佐藤惣之助覚え帖』に追悼詩1篇を寄稿。	5月、「北の海」（『海の詩』） 8月、「ひぐらし―惣師の霊にさゝぐ―」（『佐藤惣之助覚え帖』）	2月、『大東亜戦争歌集』 10月、『辻詩集』
1944	昭和19	48	10月、日本文学報国会編『詩集　大東亜』に詩1篇が収録される。	10月、「大聖戦のさなかなれば」（『詩集　大東亜』）	
1946	昭和21	50	7月頃、井上靖の訪問を受ける。 12月、詩誌『新詩人』（田中聖二編輯）に詩1篇が再録される。	12月、「かたへに坐して」（新詩人）	11月、日本国憲法公布
1947	昭和22	51	1月、詩誌『文燈』『新詩人』に詩1篇を発表。この頃すでに東京在住。	1月、「波」（文燈）、「波のまそらに」（新詩人）。	6月『日本未来派』、9月『荒地（第2次）』創刊
1958	昭和33	62	9月8日、転居した東京にて死去。		3月、井上靖『北国』
1964	昭和39	没後	くらたゆかりが自身の詩集『美しき流れ』（北日本文苑詩と民謡社）に師・方等みゆきへの追悼詩を掲載。		

履歴が判明する資料が少なく、辞書等の参考資料間でも記載内容に違いが見られるため、現在わかっている範囲での作成となった。発表作品については遺漏も多いと思われる。

『日本海詩人』昭和4年4月号～6月号および「宴」第1輯（昭和12年7月）と第3輯（昭和13年6月）に掲載されている「牧野深雪（みゆき）」の詩を、あそうしげお氏は方等みゆきの作品として収録している（「宴」については未確認）。これが方等の別名だとすると、該当時期の作品数はさらに増えることになるが、現在のところ詳細が不明のためここでは加えなかった。

【参考】

『詩之家年刊詩集　一九三二年春季版』（詩之家出版部、1932年）
あそうしげお編『方等みゆき歌集』『方等みゆき詩集「日本海詩人」篇』『方等みゆき詩集「女人詩」篇』『方等みゆき文集』『方等みゆき詩文集』『方等みゆき詩文集　補遺篇』（1994～1995年、私家版）
年表の会編『近代文学年表』（双文社出版、1995年増補3版）
浅生幸子「女の自己表現を詩作に求めた方等みゆき」（『越中人譚』第60号、チューリップテレビ、2003年）

『女人詩』創刊号から第6号　（世田谷文学館蔵）
※展示風景から

令和3年度 高志の国文学館 紀要 第7号

令和4年9月30日発行

編　集　高志の国文学館
富山県富山市舟橋南町2－22
TEL076－431－5492

印　刷　北日本印刷株式会社

発　行　高志の国文学館

※許可なく転載、複製することを禁じます。